

自然地理·考古

第一章 大地の生い立ち

第一節 市域の自然史

一 山地の岩石と平野部地下の基盤岩

生駒山地北
縁の花崗岩

大地の生い立ちをひもとくと、市域で最も古い岩石は、市域の東南隅、石宝殿古墳があるあたりから打上住宅団地の南方にかけての生駒山地北縁部の山麓に見られる花崗岩である。打

上地区の山麓部では、山地側の花崗岩体が洪積層（大阪層群）の上に、垂直に近い高角度の逆断層で衝き上げている様子が観察される（写真1）。ここでは、本来、水平に堆積していた洪積層が、山側の隆起に伴って花崗岩体との境（逆断層）では、急傾斜から、さらに逆傾斜している。これは、洪積層堆積後、何回もの大地震の度に、山地の花崗岩体が隆起し、洪積層が引きずられて持ち上げられたことを示している。

本市近くの生駒山地北縁部付近の花崗岩は、産状や貫入^{かんにゅう}関係、岩相对比などから、私市花崗岩と交野花崗岩の二つの岩体に分類されている（図1）。本市域に近い私市花崗岩は、東西五キロ、南北三キロにわたって分布し、交野花崗岩などと共に、井口禅・田結庄良昭により、分類、命名された（大阪・京都・奈良県境、交野山付近の領家花崗岩類の地質学的、岩石学的研究）『神戸大学発達科学部紀要』第七号 一九九九年。それぞれの花崗岩の放射年代は表1の通りで、今から約八〇〇〇万年ばかり前から七〇〇〇万年前にかけて、地下の深



写真1 打上地区の花崗岩

打上地区の花崗岩（左側）が大阪層群（右側）に逆断層でつきあがっている様子。人物で崖の高さが推測できる。（1982年前田昇撮影）

所に大量のマグマ（溶融した造岩物質の流動物体）が、次つぎに貫入してマグマ溜りを造り、次第に固結して深成岩（花崗岩）となった（二巻八・九頁）。

地表では山地にみられる花崗岩は、本市域の平野部の地下はもとより、近畿地方中部の基盤岩として、広く大地の土台を形成している。

領家帯（島弧に平行な地体構造）

本市域を含む花崗岩が基盤となっている地質区は、近畿地方の中部を約五〇キロ幅で東西に横断している（図2）。この地質区は、領家帯と呼ばれ、北は有馬・高槻活断層線

で美濃・丹波帯と接し、南の境界は中央構造線であるが、大阪府下では和泉層群との境となる。領家帯は、諏訪湖の近く、塩尻付近に始まり、中部地方西南部、近畿地方中央部、瀬戸内地方を経て九州の大分県まで、中央構造線の北側に、帯状に配列し、延長約七〇〇キロ、幅三〇～五〇キロに及ぶ地質区で、西南日本内帯の最南端を占めている（図3）。ちなみに、領家という名称は、天竜川西側の広い地域に分布する変成岩類を、原田豊吉が領家変成岩と命名したことから、地質区の名称になったもので、天竜川支流の水窪川中流にある地名「奥領家」にちなむ名である。地形図によると、静岡県佐久間町（浜松市天竜区）、JR飯田線城西駅西方約一五〇〇メートル及び北隣りの水窪町（浜松市天竜区）、水

表 1 本市近くの花崗岩の放射年代

交野花崗岩
8 7 0 0 万年 ± 2 0 0 万年（ジルコンの SHRIMP 年代）
8 2 0 0 万年 ± 1 0 0 万年（ジルコンの J - Pb 年代）
7 2 5 0 万年 ± 3 6 0 万年（黒雲母の K - Ar 年代）
私市花崗岩
1 億 8 6 0 万年 ± 2 1 0 万年（Rb - Sr 全岩アイソクロン年代）
7 7 7 0 万年 ± 3 9 0 万年（黒雲母の K - Ar 年代）

備考：宮地良典・田結庄良昭・寒川旭（2001）大阪東北部地域の地質、地域地質研究報告（5 万
分の 1 地質図幅）、地質調査所、P.25、第 13 図による

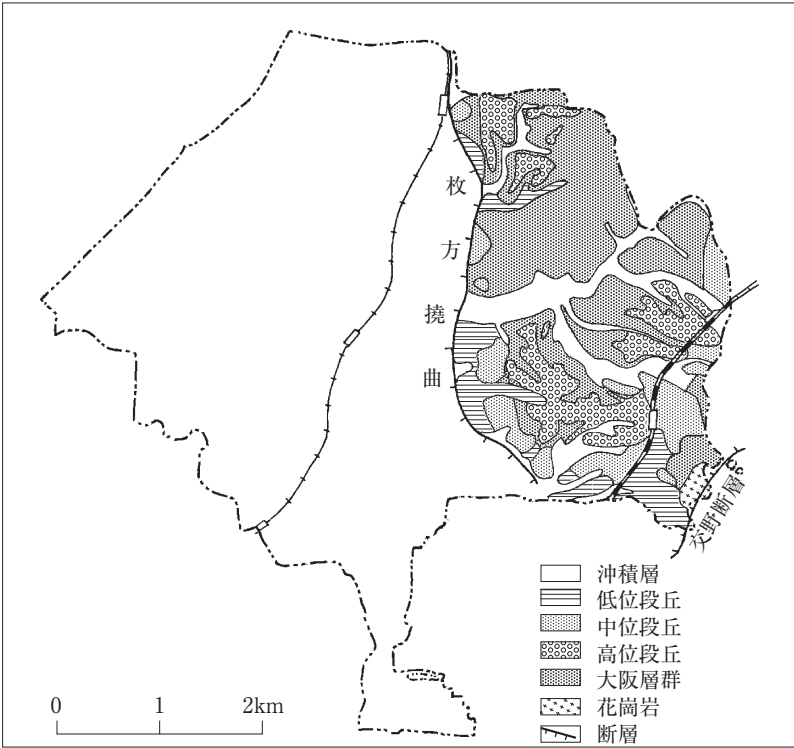


図 1 寝屋川市域の地質

備考：宮地良典・田結庄良昭・寒川旭（2001）5 万分の 1 地質図幅「大阪東北部」地質調査所 を一部簡略化
承認番号 第 63500-A-20080328-001 号

第一章 大地の生い立ち

中生代白亜紀に生成した花崗岩体は、その後、徐々に隆起して地表に達し、約三〇〇万年前、新生代第三紀鮮新世の中頃には、広く準平原（地表面の侵食が進み、海水準近くまで低められた広い平坦地）が形成されたと

花崗岩で占められている。
窪駅西方約五〇〇メートルに、それぞれ「奥領家」の地名が見える。
領家帯は、領家変成帯とも呼ばれるが、変成岩にくらべて花崗岩の分布が圧倒的に広く、全域の過半数は

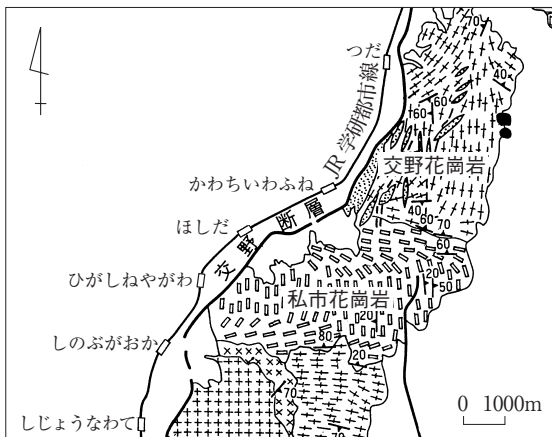


図2 生駒山地北縁部花崗岩の分類と分布

備考：前掲「大阪東北部地域の地質」、14頁、第7図による

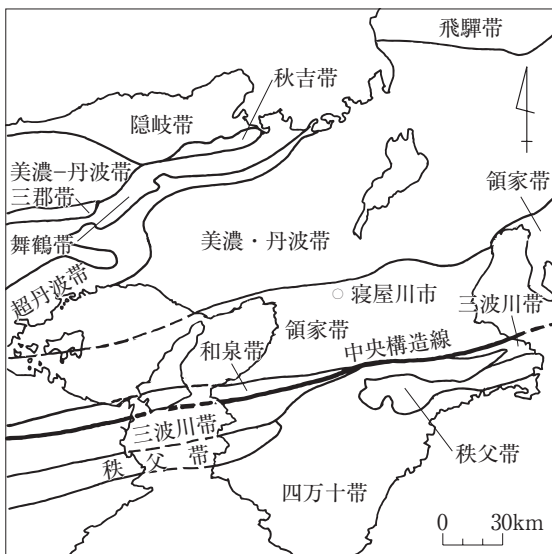


図3 近畿地方の地質区分（地体構造）

備考：磯崎行雄・丸山茂徳「日本におけるプレート造山論の歴史と日本列島の新しい地体構造区分」『地学雑誌』第100巻第5号、1991年、732頁「西南日本地帯構造概略図」による

考えられている（一卷八・九頁）。生駒山地山頂部の小起伏面は、隆起準平原の名残りとして理解されている。

二 大規模な地盤の変動

近畿三角帯の山地と

南を中央構造線、東を敦賀―伊勢湾の線、西を敦賀―淡路島の線で境された三角形

平野（盆地）の分化

状の地域は、近畿三角帯（藤田和夫が一九六二年に提唱）と呼ばれている。この地域

では、平野（または盆地）と南北方向にのびる小規模な山地が交互に配列している。このような地形の特徴は、今から約五〇〇―六〇万年前の中期更新（洪積）世から、東西方向の圧縮（主として日本海溝における太平洋プレート）の沈み込みに、伊豆地塊が本州中部に衝突した影響が重なったため）による地殻変動が、うねり変形ではまかないきれなくなり、断層地塊運動に変わり、山地と平野（盆地）の分化が著しくなったと考えられている（太田陽子ほか編『日本の地形 6 近畿・中国・四国』東京大学出版会 二〇〇四年 二六頁）。この地殻変動は六甲変動と名付けられ（藤田和夫「六甲変動、その発生前後―西南日本の交差構造と第四紀地殻変動」『第四紀研究』第七巻第四号 一九六八年）、近畿三角帯では、上下変位の大きい逆断層性の活断層が数多く発達した。これらの活断層の多くは、数千年の休止期を経て、一瞬の活動（大地震）を周期的に繰り返して、活動の度に、山地部は隆起し、平野（盆地）部の基盤は沈降して、生駒山地や大阪平野・大阪湾の地形が形成された。平成七年（一九九五）の「平成七年兵庫県南部地震」（阪神・淡路大震災）では、淡路島の山地部が隆起して、地殻変動の特徴を目の当たりにすることができた。

第一章 大地の生い立ち

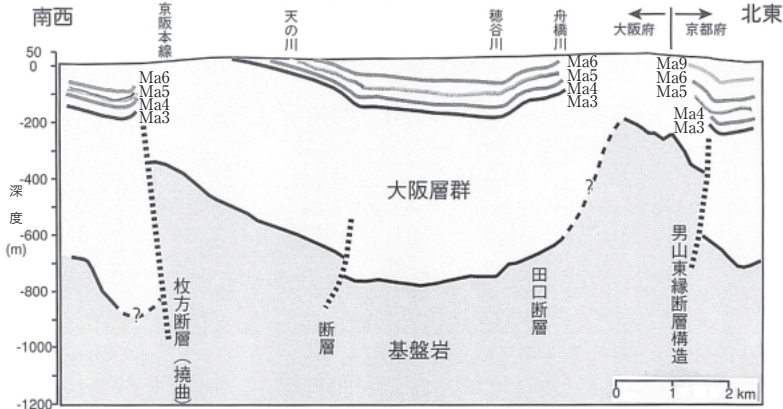


図4 枚方撓曲の地下は断層

備考：寝屋川市と枚方市の境界付近から京都府八幡市にいたる、国道1号を利用した測線で、反射法地震探査の結果。『平成14年度大阪平野地下構造調査』大阪府総務部危機管理室 2003年による

Ma9：約40万年前 Ma4：約80万年前 活断層
Ma6：約65万年前 Ma3：約85万年前 - - - 反射面が不明瞭な部分
Ma5：約70万年前

枚方撓曲の地下は断層
阪神・淡路大震災の後、大阪府が平成十四年（二〇〇二）度に行った地下構造調査のうち、本市と枚方市の境界付近から京都府八幡市にいたる、国道一号线を利用した反射法地震探査によると、枚方撓曲の地下の基盤岩の断層が確認され、その鉛直落差は約四五〇メートル、断層下盤側（西側）の基盤岩深度は、七〇〇メートルから九〇〇メートルと推定されている。また、枚方撓曲は、淀川を越えて高槻市の南部（大塚町付近）まで延びていることも確認され、基盤岩の落差は約五〇〇メートル（西落ち）である。このように、基盤の花崗岩が大きく、ずれているが、その上の地層はまだ固結していないため、地表近くでは、食い違いを起さず、撓んだ形となっているので地質調査所五万分の一地質図幅「大阪東北部」（二〇〇一年）、では、枚方撓曲の名を使用しているが、図4の断面図に示されるように、地下は断層である。『寝屋川の自然』四二頁に記載の八坂町付近の

地下の小断層は、枚方撓曲（断層）に付随する断層と考えられる。

三 丘陵をつくる大阪層群の堆積

瀬戸内地帯の沈降 今から約三〇〇万年前頃、新第三紀鮮新世の末期に、瀬戸内地帯は沈降はじめ、古琵琶湖、古奈良湖、古大阪湖、古明石湖と呼ばれている大きな凹地が出現した。これは、西北西方向

に移動するフィリピン海プレートがユーラシアプレートの下に沈み込む際の横圧力に起因すると考えられている（貝塚爽平「島弧系の大地形とプレートテクトニクス」『科学』第四二巻第一〇号 一九七二年）。

古大阪湖に流れこんだ川の砂礫が次々に堆積してできた厚い地層の重なりは、大阪層群と呼ばれている。

ながい間、淡水湖であった古大阪湖に、今からおよそ一二〇万年前頃、紀淡海峡から太平洋の海水が流入して海となった。第二瀬戸内海の誕生である（第一瀬戸内海は中新世、一五〇〇万年前頃に出現し、一四〇〇万年前頃に消滅、主として神戸以西）。しかし、ずっと海であったのではなく、気候変化による氷期の低海面期には陸成層（湖成層）を堆積した。気候変化に伴って、海進と海退を繰り返しながら、厚い地層を堆積した。

一方、大阪層群の堆積中、九州方面の火山噴火に伴う火山灰が飛来して数枚の火山灰層が堆積した。連続の良い海成粘土層（Maと表記）と、同時性の指標となる火山灰層を鍵層として、大阪層群の詳しい層序が確立した。

成田台地をつくる大阪層群

本市域の東部、東香里園町から三井が丘にかけての丘陵を構成する大阪層群は、緩やかに南東へ傾斜して重なっているので、京阪電鉄香里園駅東側の崖線に、より下部の地層

が現れる。図4の断面図に示されるように、七〇〇メートルを越える厚い地層である。丘陵南部の梅が丘一丁目あたりは、砂礫と泥の互層で、伊加賀累層（Ma2より下位の地層）に分類され、Ma1層が、交野断層とほぼ平行に、短距離であるが分布している。礫層は、ほとんどチャート礫である。東香里園町から国松町にかけての一带は、西側に香里累層（Ma2層よりMa6層までの地層）、東側に新香里累層（Ma6層より上位の地層）と分類された大阪層群より成り、Ma5及びMa6が、ほぼ南北方向に続いている（宮地良典・田結庄良昭・寒川旭『大阪東北部地域の地質、地域地質研究報告（五万分の一地質図幅）』地質調査所 二〇〇一年）。Ma5は八町池火山灰と対応する。一方、東部では、カスリ火山灰層（Ma8と対応）と寝屋火山灰層（Ma7近く、連続性にとほしい厚さ五センチ以下の白色火山灰層）が報告されている（市原実編著『大阪層群』創元社 一九九三年）。

四 台地（段丘）の形成

第四紀後半の 第四紀の更新世（洪積世）は大氷河時代として知られ、十萬年前後を周期とした寒冷期（氷期・氷河期）と短い期間の温暖期（間氷期）が繰り返された。このような気候の変化について、

旧ユーゴスラビアのミランコビッチは、地球が太陽から受ける日射量の変化が原因と考え、自身の天文学説に基づいて、日射量の変化曲線を示した。その変化の周期は、細かくは二・一万年、大きくは約一〇万年である。近年は、この日射量変動曲線から発達して、さらに海水面の変動に読み替えられるような図（深海底堆積物の酸素同位体比変動曲線）がつくられ、ステージという呼び名も与えられ、温暖期には奇数、寒冷期には偶数をあてて呼ぶことになっている（田中眞吾「西摂津・東播磨における段丘地形―第二瀬戸内海の置きみやげ―」

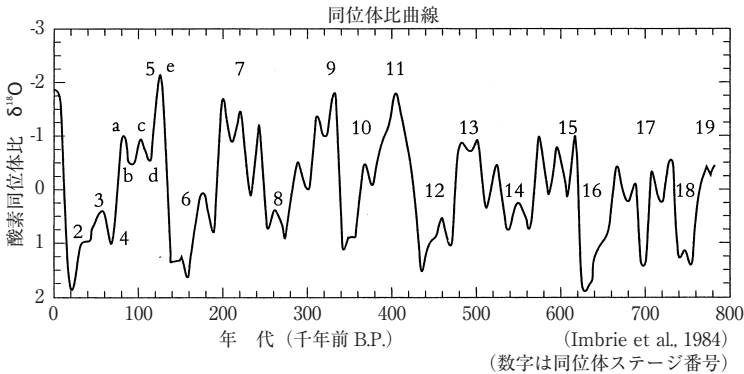


図5 海水面変化曲線 奇数が高海面期、偶数が低海面期

備考：田中眞吾「第四紀に作られた播磨とその周辺の地形」『姫路市史』第1巻上（2001年）による

『兵庫地理』第五一号（二〇〇六年）。

市域の段丘は、かつての河床両側の氾濫原・扇状地・浅海底などが、大地の隆起によって干上がり（陸化）、侵食の復活によって谷が刻まれて台地化したもので、台地を縁取る急な崖は、川や海の侵食作用で形成された侵食崖である。段丘の形成には、さらに、気候変化に伴う海面の昇降が大きな要因となっている。地球上の水はほぼ一定量と考えられるが、寒冷期には陸上に降り積もった雪が夏になっても融けず、次つぎ積もった厚い雪は山岳氷河や大陸氷床となって陸上に滞留するので、その分、海水量が減少し、海水面が低下して海岸線が沖合へと後退する現象が現れる。これを海退と呼んでいる。逆に、温暖期になると、陸上にあつた大陸氷床や山岳氷河は融けて海に帰り、海水量は増え、海水面が上昇して海岸線は陸側へ押し寄せてくる。それは海進と呼ばれている。寒冷期、山地側では寒さのために山地斜面の岩石が凍結・破碎を生じて岩くずが大量に生産されるが川の流量が少なく、岩くずを運びきれない。そのため、山地側の河床は上昇する。一方、最下流は水期の低下した海水面に続くために河床は掘られ、河川

第一章 大地の生い立ち

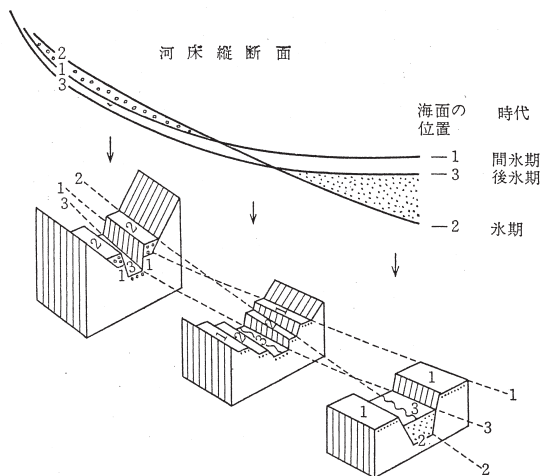


図6 氷期と間氷期（後氷期）の河川縦断面図と段丘の形成モデル

備考：貝塚爽平『日本の地形』岩波新書 1977年 による

縦断面は急なものになる。次いで温暖期になると海水面が上昇するので川の勾配は緩くなり、勾配が小さくなった河川沿いには、寒冷期に掘り込まれていた谷を埋めて土砂が堆積し、河床は上昇する。平面的には、川沿いに平野や氾濫原がより広く形成される。図6は、この関係を表したもので、寝屋川近辺の低位段丘には2、中位段丘と高位段丘は1、現在は3にあたる。このように、気候の変化に伴って河川の縦断面や横断面が変化し、上流・下流の各部における河川の堆積・侵食の状態が変化するのである。段丘は、大地の隆起と気候変化が大きくかわって形成されたものである（前掲「西摂津・東播磨における段丘地形」）。

高位段丘

本市域の場合、枚方撓曲以東の地域は、更新世を通じて大地の隆起傾向が続いたため、新旧の段丘面が広く発達しており、高谷好一・市原実によつて、高位・中位・低位の三つに区分されている（枚方丘陵の第四紀層——とくに新香里層・枚方層にみられる気候変化について『地質学雑誌』第七九三号 一九六一年）。以下、地質調査所五万分之一地質図幅の説明書『大阪東北部地域の地質』（二〇〇一年）に従つて段丘堆積物等を記載する。高位段丘は、JR学研都市線東寝屋川駅の西方一

第一節 市域の自然史

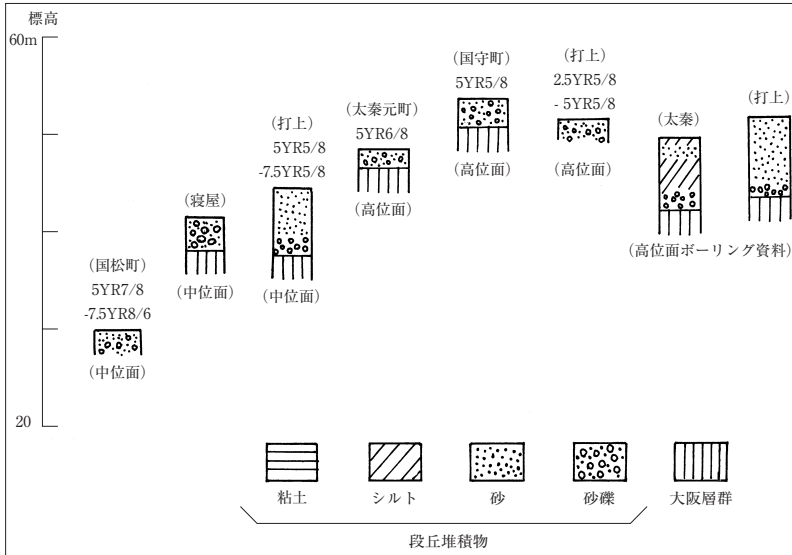


図7 寝屋川市域の段丘堆積物

備考：宮地良典・田結庄良昭・寒川旭（2001）大阪東北部地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1地質幅）、地質調査所による

帯や寝屋付近、東香里園町等の平坦な高台で、南部の太秦元町では、大阪層群の海成粘土層（厚さ四メートル）とそれを覆う砂層（厚さ五メートル）を不整合に覆って、厚さ約二メートルの砂礫層（段丘堆積物）が載っている。段丘礫層の礫は最大径五センチの亜円礫で、主にチャートからなり、わずかに花崗岩や砂岩の礫を含んでいる。礫層の充填物（マトリックス）は5YR 5／8の色調である。また国守町（明和一〜二・高倉一〜二丁目）では、大阪層群の粘土・砂礫層を緩やかな谷状に侵食して、厚さ三メートルの段丘礫層が堆積している。最大径五センチの礫を含む花崗岩質の砂層から構成され、2・5YR 5／8から5YR 5／8の赤さである。北部の東香里園町の北隣、枚方市香里園町の段丘の観察から類推できる最大径一五センチの亜円礫を含む段丘礫層が大阪層群を不整合に覆って

三メートル程度の厚さで堆積し、チャートのほか花崗岩礫・砂岩礫をわずかに含み、五Y R 5／8の色調を示している。また、ボーリング資料では、打上で、層厚八メートルの高位段丘堆積物が大阪層群のシルトを覆っているが、最下部の一・二メートルは砂礫層、それより上位は砂層で構成されている。このように、高位段丘礫層は赤色風化殻を持つものが多く、この赤色風化は最終間氷期の温暖期に受けたとすると、段丘層の堆積は、それ以前の間氷期と考えられている（前掲『大阪東北部地域の地質』）。

中位段丘

東部台地の西縁近くに分布する中位段丘は、一三万年前から八万年頃の最終間氷期に形成された段丘層からなる台地で、大阪市の上町台地をつくっている上町層に対比され、間氷期の高い海面の上町海と呼ばれる広い海の海底に堆積した地層からなる。Ma 12の層準で、一般に、上部の淡水成砂層中に、阿蘇四火山灰層を挟在し、全国的には、下末吉海進に対応する堆積層である。中位段丘の堆積物は、南部の国守町では、最大径五センチの礫を含む砂層が厚さ三メートル、7・5Y R 5／6の色調を示すが、台地の西端近くでは、最大径七センチの亜角―亜円礫を含む粗粒砂層が二・五メートルの厚さに堆積し、礫の大半はチャートで花崗岩や砂岩礫もわずかに含んでいる。また、寝屋のボーリング資料では、大阪層群の砂層を覆って、中位面堆積物と考えられる厚さ三・四メートルの砂礫層が認められ、打上では、大阪層群の粘土層を覆う厚さ七メートルの中位面堆積物が見られるが、最下部は砂礫層、中―上部は砂―シルト層で構成されている。

低位段丘

低位段丘面は、台地西縁に分布し、中位段丘を開析する浅くて幅の広い小河谷の周囲に、小扇状地面を形成している。低位段丘面は、ほとんど開析されず、堆積物も赤色風化を受けていな

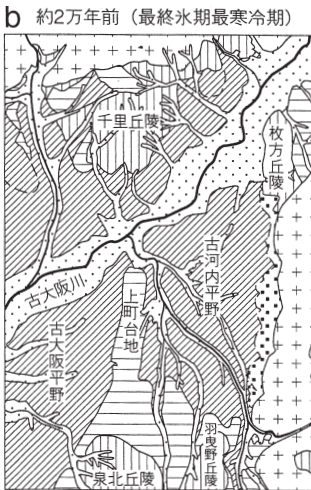
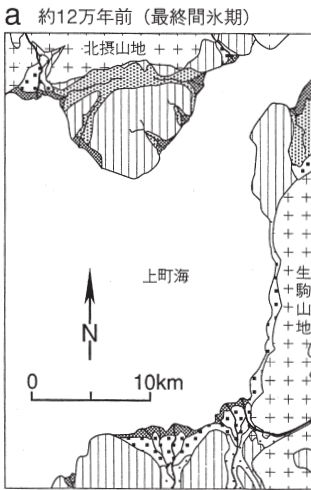
い。最終氷期の海面が低かったところに、東部の高位・中位の段丘から流れ出した多くの小河川の運ぶ砂礫によって小扇状地列がつくられたところで、これらの扇状地の下流部は、市域西部の沖積層（縄文海進の海の堆積物）の下に続いている。淀川の川向い、高槻市の富田台地は、同じ低位段丘であるが、約二万五〇〇〇年前を示す寒冷な植物化石が発見されている。

第二節 第四紀の気候変化と自然の変化

一 平野の形成

最終氷期の海進と寝屋川地方（上町海の時代）

今から約一三万年から約七万年前までは、世界の気候が冬も暖かく雨の多い温暖期（最終間氷期）で、大陸氷床や山岳氷河の水が融けて海へ帰り、世界的に



趙（2001）を小倉博之が修正・加筆して作

第一章 大地の生い立ち

海水面が上昇した。寝屋川地方でも河内平野の奥まで海が広がっていた(図8a)。この海は、上町海と呼ばれる、「河内平野がなかったところ」と表現されている(那須孝悌・樽野博幸「河内平野の生い立ち」大阪市立自然史博物館編『河内平野の生い立ち』一九八一年)。現在の成田台地の西端部分まで海が上がっていた。この時期、

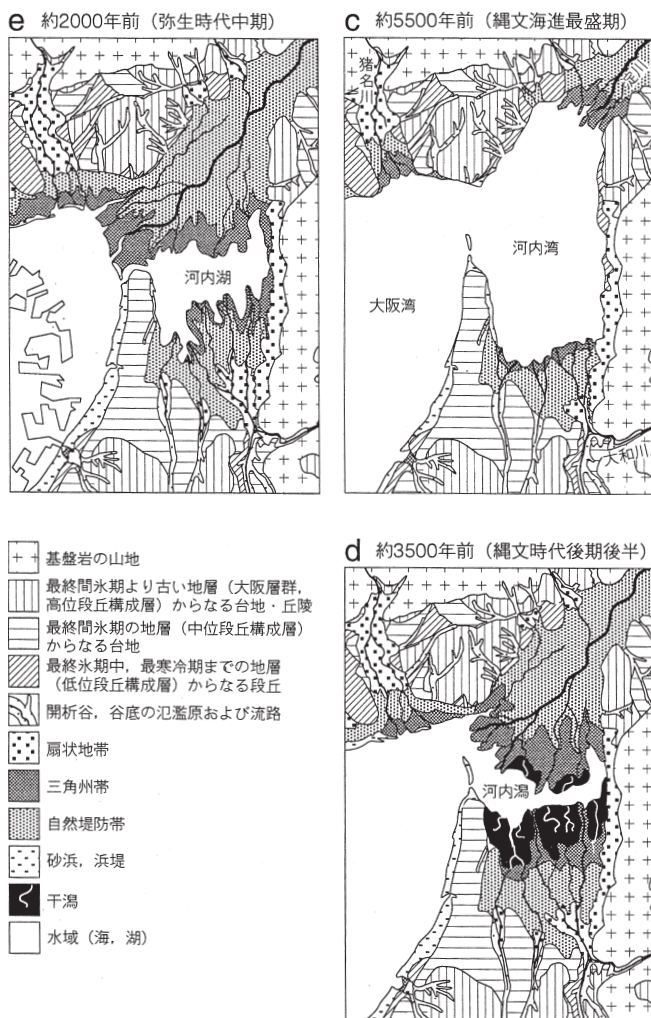


図8 大阪平野における最終間氷期以降の古地理復元図

備考: 松田順一郎原図を那須・樽野(1981)、市原(1991)、趙ほか(1999)、松田(2001)、成。太田ほか編『日本の地形6 近畿・中国・四国』東京大学出版会、2004年による。

大阪市の上町台地も海面下に沈んでいた。この上町海の広がりには、この時期に海底に堆積した Ma12 層とその上の海成砂礫層の分布範囲から復元された。これらの堆積層は現在、陸上では中位段丘を形成している。

最終氷期最寒冷期の海退と寝屋川地方（古大阪平野の時代）
 今から約七万年前から一万五〇〇〇年前までは寒冷な気候で、最終氷期と呼ばれる。なかでも、約二万年前から約一万八〇〇〇年前の最終氷期最寒冷期には、大陸氷床が拡大し、海面が低下した。この時期の海面低下は、現海面より約一二〇メートルに及び、現在の大阪湾や瀬戸内海は干上がり、本州・四国・九州は一続きの陸地となった。海岸線は紀伊水道の南まで後退した。以下、梶山彦太郎・市原実（『大阪平野の私たち』青木書店 一九八六年）をはじめ、

那須孝悌・樽野博幸（『第四紀と河内平野』前掲『河内平野の生いたち』、松田順一郎（『景観変遷にかかわる時間オーダー——大阪府河内平野の古環境を例として——』橋本征治編『人文地理の広場』大明堂 二〇〇一年）、小倉博之（前掲『日本の地形6 近畿・中国・四国』）等の解説に従って河内平野の変遷を述べる。約二万年前は、年平均気温は現在より約八度低く、干上がった河内平野は盆地となつて、淀川と大和川と寝屋川等の支流は、約一二〇メートルも低下（海岸線は紀淡海峡の南）した海水面に適応するために河川勾配が大きくなり、侵食力を増して深い谷を刻んで流れていた（図8b）。現在、東部の台地を刻む小さな谷がたくさんあるが、それらの谷は大地を削って谷を作るほどの川の流れもなく、どうしてこのような谷ができたのか不思議に感じるが、最終氷期のこの時期に、降雨時に雨水が集まって台地上を流れ、やがて小さくぼみが作られ、降雨のたびに谷頭をのぼして小谷を作り、わずかな水流でも急勾配のため侵食力が強く、次第に深い谷を作った。後氷期になつて海水面が上昇すると、氷期の深い谷は新しい堆積物で埋積され、現在見るような浅い平らな谷底に

変容した。

縄文海進と

寢屋川地方

今から約一万五〇〇年前から、地球の温暖化によって大陸氷床の融解が始まり、約一万四〇〇〇年前から融氷水が海に流れ込んで急激な海水面の上昇が起こった。約一万二〇〇〇年前の小寒冷期（ヤンガー・ドリアス期）を経て気候は急激に温暖化し、海水面は上昇した（縄文海進）。海水面上昇量は、カリブ海の沈水サンゴ礁の掘削データより、約一二〇メートルに達した（米倉伸之・辻誠一郎・岡村道雄『最終氷期の終焉と縄文文化の成立・展開』の趣旨）『第四紀研究』第三六巻第五号 一九九七年）。

河内湾の時代

大阪平野では、約九〇〇〇年前に、現在の大阪湾岸近くにあった海岸線は、わずか二〇〇年の間に二〇キロ以上内陸にある本市域や生駒山麓にまで達した。この時期、寢屋川近辺では、図8cのように、海水が浸入して河内平野は大きな内湾となった。六五〇〇年前ごろには、海水面は現在とほぼ同じレベルに到達し、約六〇〇〇年から約五三〇〇年前には現在の海面を一〜二メートル上回り、上町台地が南から半島のようになって、河内湾と大阪湾とをへだてていた。東大阪市布市町からは、体長一〇メートル以上と思われるマッコウクジラの化石骨が見つかっていることから、今から約六五〇〇年前ごろの河内湾には、クジラが潮をふいて泳ぎまわっていた。一方、この河内湾の東北隅あたりでは、淀川が三角州をつくり、次第に湾を埋めたてていった。本市域の多くは、約五〇〇〇年〜四〇〇〇年前ごろには、三角州や自然堤防が形成され、陸化していたと考えられている。気温は現在より約五度高かった。

河内潟の時代

縄文時代後期には、上町台地の西側は、打ち寄せる波によって少しずつ削られ、海食崖がつくられてゆくが、削りとられた砂礫は、南から北へ流れる沿岸流によって運ばれ先端の

砂嘴・砂州がのびて湾口を狭め、海水の流入を妨げ、海面もわずかながら下がったことも関係して、海域は汽水の潟湖（せせうこ）となった。干潟や湖の汀線（ていせん）、河川の後背湿地にはヨシ原が広がった（図8d）。

河内湖の時代

今から約三〇〇〇年前、縄文時代晩期に小海退があり、海水面は現海水面より少し下がり、約二八〇〇年前には約二メートル低下し、潟湖の出口の砂嘴はさらに発達して水域は淡水化した（図8e）。干潟は離水して集落の立地を可能にした。その後、約一七〇〇年前の古墳時代前期まで水位は緩やかに上昇したため、三角州分流利間の湖沼の汀線は後退して水域が少し拡大した。弥生時代中期以降、自然堤防や扇状地帯で、氾濫と堆積が繰り返され、河内湖は次第に縮小し、約一六〇〇年前以降の歴史時代に大阪平野の完成期を迎えたのである。

低地の沖積層

本市の西半分、市街地の広がる低地部を構成する沖積層は、今から一万年前から現在までに、内湾底に堆積した粘土層と淀川等の川が運搬した砂礫層とから出来ている。粘土層は、沖積層中部粘土層と名付けられ、現在の大阪湾の海底に分布している粘土層と連続するもので、海成粘土層一三（Ma13）にあたる。後氷期の大規模な海進の過程で、最終氷期（海退期）の陸地の上に、不整合に堆積した地層である。従って、沖積層は沖積世一万年間の地層を指す語句であるが、地層の重なりの中から、ちょうど一万年前の地層を探し出すのは、一般には困難なので、海退期の陸地面との不整合面より上の地層を沖積層として扱っている。Ma13は、放射性炭素による年代測定法によって、約八〇〇〇年前から堆積し始めたとされている（前田保夫「大阪湾の自然史―潜函でとらえた海と森の変遷」『科学』第四七巻第九号 一九七七年）。八〇〇〇年前の海面高度は、今より一二メートル低いが、河内湾の奥まで海が広がった（梶山彦太郎・市原実

第一章 大地の生い立ち

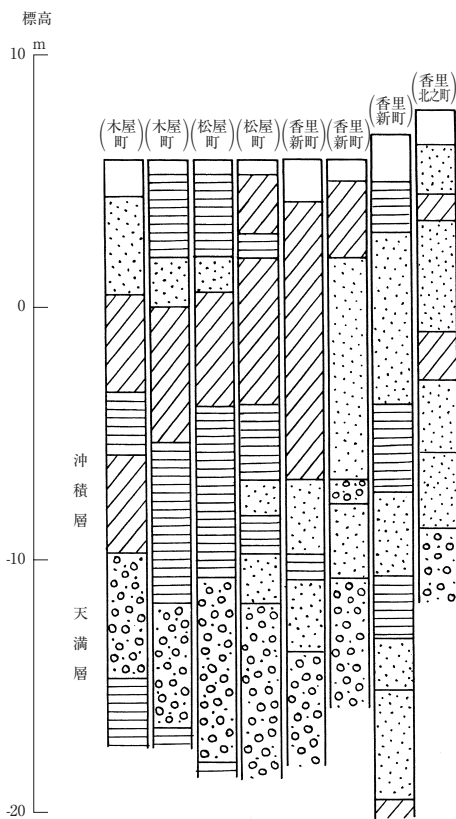


図9 寝屋川市北部のボーリング柱状図

備考：原図・凡例は図7に同じ

「大阪平野の発達史」¹⁴ Cデータ年代からみた」『地質学論集』七 一九七二年）。北河内のMa13の基底高度はマ
 イナス一〇メートルあたりで、八〇〇〇年前の海面高度マイナス一二メートルの考えと調和的である（三田
 村宗樹・吉川周作「堆積速度の差異からみた大阪堆積盆地における後期更新世の基盤ブロックの運動」『地球科学』第五
 巻第一号 一九九七年）。六〇〇〇年前ごろにピークに達した海面はその後、次第に低下（縄文中期と後期の
 小海退）し、それに伴って海岸線が前進し、大阪平野の表層部が完成した。大阪平野の沖積層は、下部層は砂・
 シルトからなり、中部層は海成粘土層を主体とし、上部層は砂・シルトからなる地層である。ボーリング資
 料によると、北河内地域では、深さ一五～二〇メートルまで沖積層が堆積していることがわかつてい

る。本
 市域北部の木屋町、松屋
 町、香里新町あたりの
 ボーリング資料では、一
 八～二〇メートルの沖
 積層（粘土・シルト・砂）
 の下に、天満層（低位段
 丘層に相当）の砂礫層が
 五～八メートルの厚さ
 で堆積している。

第二章 黎明期の寝屋川市域

第一節 旧石器時代のひとびと

一 大阪の旧石器文化

岩宿遺跡と 昭和二十一年（一九四六）、相沢忠洋^{あいざわただひろ}によって群馬県桐生市岩宿の道路の切通しの赤土の中か

旧石器文化 ら一片の黒曜石の尖頭器^{せんとうき}が発見された。この発見によって日本列島に旧石器文化が存在し旧

石器時代に遡ることが明らかになった。戦後考古学の最大の発見の一つである。昭和二十四年（一九四九）

杉原莊介、芹沢長介ら明治大学考古学研究室による発掘調査が実施され、日本列島にも縄文時代以前の石器文化（旧石器文化、当時は先土器文化）の存在が確定された。岩宿遺跡で旧石器文化の存在が明らかになった後、全国各地で旧石器遺跡の存在が報告されるようになった。

平成十二年（二〇〇〇）十一月五日、日本列島を揺るがす事件が発覚した。前・中期旧石器捏造事件

造事件である。教科書にも記載され六〇万年前に遡るとされた宮城県上高森遺跡^{かみたかもり}で、東北旧石器文化研究所の元副理事長藤村新一が穴を掘って石器を埋めたのである。このことは、発掘調査の事実の捏造というあってはならないことであり、今日まで築いてきた考古学における信頼性を瓦解させるものであった。事件発覚後、日本考古学協会は「前・中期旧石器問題調査研究特別委員会」を立ち上げ、各種の検証調

査と分析を行い、彼が関わった調査においてほとんどの遺跡で捏造が行われていたことを明らかにした。（日本考古学協会第六九回総会前・中期旧石器問題調査研究特別委員会総括報告）これにより日本における前期・中期旧石器文化の研究は振り出しに戻った。

旧石器時

代の自然

氷河期の代表的なものとして、ギュンツ・ミンデル・リス・ヴュルムの四氷期がある。今から一万年数千年前を頂点とする最終氷期であるヴュルム氷期には、海水面が現在より一五〇メートルほど低く、海岸線が紀伊半島のあたりにあったと考えられている。列島は、北はシベリア、南は朝鮮半島と陸続きであった。そのため、大陸からナウマンゾウやオオツノジカなどの大型の動物の移動がみられた。それらの動物たちを追い、人類も列島内に移動してきたであろう。瀬戸内海の海底からナウマンゾウの化石が魚網にかかって引き上げられることがある。しかし、このような化石は大阪湾や瀬戸内海の限られた地域で集中的に採集されるようで、紀淡海峡の友ヶ島沖北方の「アイの沼」、鳴門海峡の阿那賀沖の「ゼンザ瀬」、明石大久保海岸沖、小豆島白浜沖、高松市の女木島沖などが集中して採集される地点である（亀井節夫『日本に象がいたころ』岩波書店 一九六七年）。また、長野県野尻湖湖底遺跡では、ナウマンゾウやオオツノジカの化石が発掘調査によって出土している。この発掘でナウマンゾウがいた時期が約二万年前の更新世末期で、氷河期最後のヴュルム氷期であることが推測された。

大阪の旧

石器遺跡

大正六年（一九一七）、京都帝国大学考古学研究室の濱田耕作によって、日本で始めての本格的な発掘調査が行われた藤井寺市国府遺跡こくふの調査以来、大阪府内では旧石器時代の遺跡調査が開始された。現在府内における旧石器時代遺跡数は三〇〇を超えている（手島美香「大阪府下の旧石器時代遺跡」

『旧石器人たちの活動をさぐる―日本と韓国の旧石器研究から―』（二〇〇三年）が、すべて後期旧石器文化期以降に属するものであり、海拔二〇〇～三〇メートルの中段・低位段丘上に立地し、当時の地形からすると海拔一七〇メートル前後の高地に位置している。その分布は大阪府内全域に及ぶが、とくに二上山・羽曳野台地・生駒西麓・富田台地・大阪湾東岸に濃密にみられる。しかし、現在の大阪平野には二〇メートル以上も沖積層が堆積しており、当然それらの下には旧石器時代人の痕跡があるであろう。

最近大阪府内において調査された数少ない旧石器時代の遺跡のなかで成果をあげている遺跡としては、羽曳野市翠鳥園遺跡^{すいちょうえん}、大阪市長原遺跡、箕面市粟生間谷遺跡^{あおまだに}があり、以下その概要を紹介する。

翠鳥園遺跡は、平成四年（一九九二）に発掘調査された。二上山西麓に広がる羽曳野台地に位置している。調査では、二万数千点にのぼる石器が出土した。石器製作址も三〇カ所以上検出され、石器製作址は小規模なもので間隔をおいて分布していた。またサヌカイトの母岩の状態まで復元できる接合資料も多数出土した。長原遺跡は、隣接する八尾市八尾南遺跡とともに平野部における埋没低位段丘上に位置する遺跡で、昭和四十八年（一九七三）地下鉄谷町線延伸工事に伴う調査で発見された。遺跡の範囲は、長吉・長原を中心に東西約六〇〇メートル、南北一キロ以上と考えられる。遺跡からは数箇所の石器製作址と数百点の石器と百点近い接合資料が出土している。

粟生間谷遺跡は、北摂山地の南麓の丘陵上に位置する遺跡である。三千点の資料が出土している。石器製作ブロックが七カ所検出され礫群に伴う石器群もあり、良好なまとまりをもっている。接合資料も多数確認されており、石器群の石材はサヌカイトとチャートが使用され、分布はそれぞれに集中箇所に分かれ、二側

緑加工のナイフ形石器を主体としている。石器組成は始良^{あいら}Tn火山灰（AT）降灰以後の石器群と考えられる。

火山灰

旧石器時代編年の指標となるものに火山灰の存在がある。特に広域火山灰としては、ATのような標識となるテフラがある。この火山灰は北海道地方を除く日本列島の広い地域に分布するので、重要な編年指標である。年代観でいえば約二・二万年前というデータが示されている。鹿児島県錦江湾北部一帯にあったとされる始良カルデラから噴出した火山灰で、密度の小さいものが上空の偏西風によって遠く東北地方まで運ばれて堆積したものである。ATの上位か下位かにより遺物の年代決定が計られ、旧石器時代遺跡の発掘調査の際の重要なポイントとなる層である。

本市域では、第二京阪道路建設に伴い事前に発掘調査された讀良郡条里遺跡においてATが発見されている（財大阪府文化財センター『北河内発掘！緑立つ道に歴史わきたつ第二京阪道路内遺跡の発掘調査記録』二〇〇五年）。

地域の旧

本市域の旧石器時代の遺跡としては、従前から伝寝屋長者屋敷跡遺跡・太秦遺跡・高宮遺跡・

石器遺跡

讀良川遺跡^{さうがわ}の四遺跡が確認されていたが、出土する石器は、翼状剥片^{はくへん}を利用した瀬戸内技法

の国府型ナイフ形石器である。遺構に伴うものではなく、全て遺物包含層からの出土である。

最近の第二京阪道路建設に伴い事前に発掘調査された遺跡としては、高宮遺跡・小路遺跡で国府型ナイフ形石器が出土している。小路遺跡からは、切り出し状ナイフ形石器も出土している。讀良郡条里遺跡からは尖頭器も出土している。

第一節 旧石器時代のひとびと

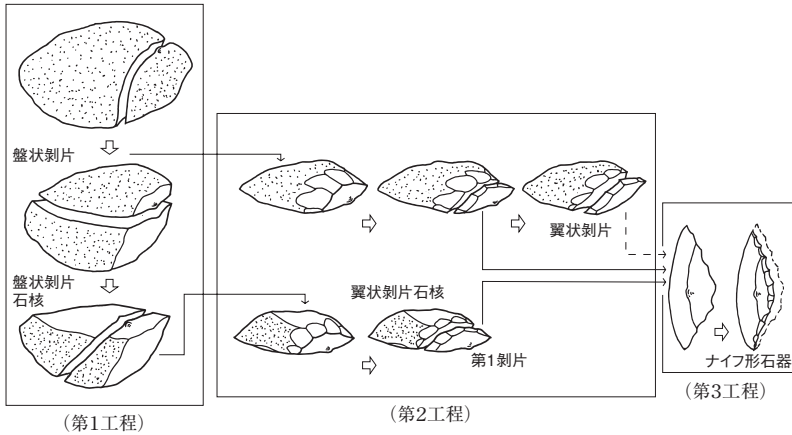


図 10 瀬戸内技法の工程概念図

備考：松藤和人「旧石器時代人の生活」『日本の古代』4 中央公論社 1986 年より転載

二 石器の製作技法とナイフ形石器

瀬戸内技法と国府 石器の製作技法にはさまざまな方法があり、いくつかの地域的差異がみられる。

東北地方の東山型ナイフ形石器、中部地方北半から東北地方の杉久保型ナイフ形石器、中部地方南半から関東地方の茂呂型ナイフ形石器、九州地方の九州型ナイフ形石器の分布（図11）があり、それぞれ特徴的な技法を有している。近畿地方は瀬戸内技法の国府型ナイフ形石器という非常に特徴的な技法のナイフ形石器を有する地域である。

瀬戸内技法は、藤井寺市国府遺跡出土の石器の整理から鎌木義昌が提唱し、後に松藤和人により補正されたナイフ形石器の製作技法である。その製作技法はサヌカイトという石材の性質を利用した独特のものである。この技法は、大きく三つの工程からなっている。「第一工程」は、サヌカイト礫の一端に打撃を加えて大きく割って盤状剥片を作り出す。「第二工程」は、盤状剥片に細かな調整加工を施して、同じ形・同じ大きさの規格的な剥片を連続して得る。これを翼状剥片

第二章 黎明期の寝屋川市域

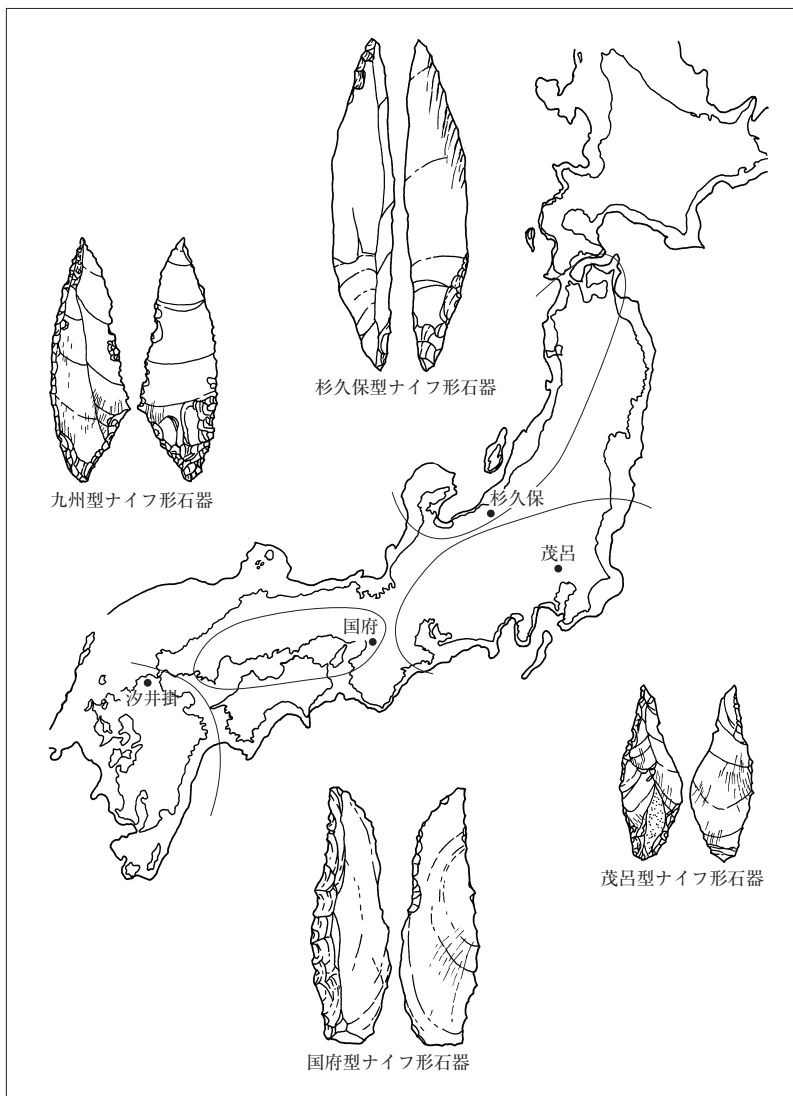


図 11 ナイフ形石器の地方色
備考：『大阪府史』第1巻 114 頁より転載

と呼んでいる。「第三工程」は、翼状剥片にさらに仕上げの加工を施してナイフ形石器ができる(図10)。このように、規格的な横長の剥片を一定の手順で体系的に量産することが可能な剥離法が瀬戸内技法であり、その石材となるサヌカイトの性質を理解し、効率的につくりだされたものである。この翼状剥片を利用してつくられたナイフ形石器は、最初に確認された国府遺跡の名をとって「国府型ナイフ形石器」と呼ばれている。そして、その分布は、近畿地方西部や瀬戸内中央部を中心に行っている。

第二節 縄文時代の讃良川遺跡

一 土器を持つくらし

土器の出現 縄文時代は、わが国の歴史上最初の土器文化である。土器の表面に縄目文様を代表としてつけたものの特徴としている。

わが国最古の土器は、煮炊きに適した平底ないしは丸底の深鉢で、口縁部に細い粘土紐を貼り付けただけの「隆起線文土器」と呼ばれるものであり、愛媛県上黒岩岩陰遺跡・長崎県福井洞穴遺跡などの洞穴遺跡から出土している。隆起線文土器は、¹⁴C放射性炭素による年代測定の結果、今から一万二〇〇〇年前の年代が与えられている世界最古の土器でもある。

考古学の大きな命題として「いつ、どこで、どのようにして土器が出現したのか」という問題がある。しかし、残念ながら今それに対する明快な答えは無い。

縄文時代から全国各地で多量につくられるようになる縄文土器の器壁には煤や焦げ付きが付着し、内部にはこびりついた滓がみられることから、火にあたっていることが明らかであり、これらが煮沸・煮炊きに使用されたことが推察される。

土器の出現により、いままで食用にすることができなかった植物・動物の多くが食用可能となり、とくに植物性食料における比重がかなり増加した。また食糧を貯蔵することも可能になった。煮炊き料理の普及は食物の種類を増加させ、また従来の食事の内容や調理方法などが一変し、食生活を安定させ豊かな生活が展開されるようになり、定住生活への移行を可能にした。

土器の出現は、縄文人たちが山や海の恵みを受けて豊かな文化を生み出した狩猟・採集民であったことを物語っている。

二 縄文時代の時代区分

時代区分

考古学における各時代の時代区分の基準となるのが土器の変遷である。

約一万年もの期間がある縄文時代の時期区分は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六時期に区分されている。この六期区分は、山内清男の土器編年が基礎となっている。

現在では、縄文土器の種類ごとの形や文様の特徴を約一〇〇年単位の変化を土器型式としてとらえて区分している。



写真2 東大阪市神並遺跡出土神宮寺式土器
(東大阪市教育委員会提供)

地域の縄文 本市域及び周辺における各時期の遺跡の様
時代遺跡 相を概観してみると、草創期には、本市小

路に所在する讃良郡条里遺跡からサヌカイト製の槍先(尖
頭器)の破片が出土している。

早期には、この時期の近畿地方の標識として神宮寺式と
命名された押型文土器を出土した交野市神宮寺遺跡や、神
宮寺式に後出する穂谷式の枚方市穂谷遺跡がある。神宮寺
遺跡は昭和三十三年(一九五八)、片山長三によって発見さ
れ、数度の調査が実施された。押型文をもち、底の尖った
尖底の土器であるが、この土器の全体の器形は永く不明で
あった。しかし、昭和五十七年(一九八二)、東大阪市神並
遺跡から多数の神宮寺式土器の破片が出土し、初めてその全体像を復元することが可能になった(東大阪市
教育委員会・(財)東大阪市文化財協会『神並遺跡Ⅱ』一九八七年)。

本市域では讃良郡条里遺跡から、粕畑式入海式の条痕文土器が出土している。この土器の出土は大阪府
内においても数例しかなく、極めて貴重な資料の出土となった(財)大阪府文化財センター『讃良郡条里遺跡(そ
の1)』(二〇〇四年)。また、サヌカイト製の槍先(尖頭器)の破片も出土している。小路遺跡からは、石鏃が
出土している。

前期には、地球規模での気候の温暖化が進み、海進現象によって海面が上昇し、海面が現在より約二～三メートル高く、海岸線が内陸部の奥深くまで入り込み、河内平野のほぼ全域に海は広がり「河内湾」を形成していた。この海進現象を「縄文海進」と呼んでいる。

高宮遺跡は、昭和五十五年（一九八〇）・昭和五十七年（一九八二）の発掘調査において縄文時代前期後半の北白川下層Ⅱc式・Ⅲ式・大歳山式土器や石鏃・石錐・石匙・石小刀が出土している。昭和五十五年の調査では、東西三・六メートル×南北一・八メートルで長楕円形をした土坑を、昭和五十七年の調査では、東西五メートル×南北七メートル・深さ一メートルの土坑を検出した。ともに内部から北白川下層式・大歳山式土器や石器が出土している。遺跡は、海拔二五メートル前後の丘陵上に位置しており、縄文海進の進んだ河内平野の内湾（河内湾）を望む丘の上に立地している。

小路遺跡からは、北白川下層Ⅱb・Ⅲ式・大歳山式の土器や石器が川のほとりから出土している。石器はまとまって出土し、同時に剥片も多数出土していることから、この地において石器製作が行われていた可能性が考えられる。その他出土している石器としては、石鏃・石匙・楔形石器・磨石・石皿などがある。また、不定形土坑から土器片と石鏃が出土している。

中期には、貯蔵穴や土坑、多種多様な遺物が出土し、船元式土器を多量に出土した西日本を代表する讃良川遺跡がある。讃良郡条里遺跡の川の中からは船元式土器が、川のはとりからは里木Ⅱ式・北白川C式土器が出土している。高宮遺跡では、丘陵裾部を蛇行して南側へと流出する流路（船元Ⅰ式が出土）が検出されている。また石匙・石鏃等の出土もみられる。讃良川遺跡の南西の四條畷市砂遺跡からも船元式土器が出土し

ている。

後期には、小路遺跡では底に礫が敷き詰められた調理跡とみられるピットから北白川上層Ⅲ式・元住吉山式土器が出土している。讃良川遺跡の上流約四〇〇メートルの四條畷市更良岡山遺跡は、後期初頭から晩期まで続く集落である。土器は、瀬戸内系の中津式、関東系の加曾利B式、近畿の一乗寺KI式、元住吉I・II式、宮滝式、晩期の滋賀里式、橿原式、船橋式とともに東北系の大洞BC式が出土している。中津式の深鉢と倒れたケヤキの太木のそばから、「大型彫刻石棒」が出土している。また、直径六メートルと七メートルの環状に配された晩期の土坑墓が二七基発見された。

晩期には、高宮八丁遺跡では、昭和六十年（一九八五）・六十一年（一九八六）の発掘調査において遺構は伴わないが、弥生時代前期の土器と一緒に縄文時代晩期後葉の刻み目突帯文土器の滋賀里Ⅳ式・船橋式・長



写真3 四條畷市更良岡山遺跡出土大型彫刻石棒
(四條畷市立歴史民俗資料館提供)

原式の土器片が出土している。当地における縄文と弥生の接点の様相を示すものとして注目される。

長保寺遺跡では、平成元年（一九八九）の発掘調査において、縄文時代の深鉢が平安時代の井戸の壁面から出土した。深鉢は、縄文時代晩期の滋賀里Ⅲ式とⅣ式の土器である。これらは、合わせ口の土器棺に使用されていた可能性がある。そのうち滋賀里Ⅲ式の土器には糊の圧痕が残されており、稲作農耕との関連が考

えられる。

その他の遺跡として、縄文時代の遺物は出土するものの、遺構があまり明確でない遺跡がある。

伝寝屋長者屋敷跡遺跡は、昭和五十八年（一九八三）の発掘調査において、遺物包含層ほくがんの中から縄文土器は伴わないものの石鏃が出土している。石鏃はチャート製一点以外は全てサヌカイト製である。遺跡は、タチ川右岸の台地上に位置しており、上流には縄文時代中期末の交野市星田旭遺跡が存在している。

三味頭さみがしら遺跡は、平成元年（一九八九）の発掘調査において、縄文土器は出土していないが、石鏃・石錐・スクレイパー・石槍・磨石の石器類が出土している。遺跡は海拔二〇メートル前後の丘陵上に位置しており、丘陵を南へ下りた地点には縄文時代中期の讃良川遺跡や後期・晩期の更良岡山遺跡が存在する。

平成十二年度から始まった第二京阪道路建設に先立って行われた発掘調査によって市域において、新たに縄文時代の遺跡が発見され多くの資料の増加がみられた。

三 縄文の交易センター

讃良川遺跡は、平成二年（一九九〇）、讃良川河川改修に先立つ発掘調査で新たに発見された遺跡である。調査の結果、南接する四條畷市にまたがって所在する集落遺跡であり、縄文時

代中期初頭の鷹島式から始まり、中期中頃の船元Ⅱ・Ⅲ式の時期を最盛期とし、後期初頭にかけて続くことが明らかになった。遺跡は、生駒山麓に源を発し西流する讃良川が形成した扇状地の縁辺に位置する。

発掘調査で発見された遺物・遺構は、土器・石器・骨類（動物遺存体）、貯蔵穴・土坑・溝等である。

各地の土器

讀良川遺跡から出土した土器の様相は、縄文時代中期前半から後半にかけて東海地方以西から近畿・中国・四国地方を中心に展開された土器群である「船元式」が主体で船元Ⅰ式ⅡⅢⅣ式の里木Ⅱ式が大半を占めている。他地域の土器としては、中期前葉には船元Ⅰ式に併行する新保・新崎式の北陸系統や北裏Ⅰ式の東海系統の土器がみられ、中期中葉では船元Ⅱ式に併行する大畑Ⅱ式・山田平式や船元ⅢⅣ式に併行する北屋敷式・咲畑式の中中部・東海系統の土器の割合が多くなる傾向にある。東北地方の土器としては大木Ⅷa式等があり、関東地方の土器としては勝坂式・加曾利Ⅰ式があるなど各地の土器の出土がみられ、縄文時代中期における東西の交流が活発に行われていた様子がうかがえる。中期後葉の土器として、北白川Ⅰ式も少量出土している。

多彩な出

多彩な出土遺物としては、深鉢・浅鉢・耳栓・土器片・鍾等の土器類、石鏃・石錐・石匙・石鋤・石斧・石皿・敲石・磨石・凹石・石錘・台石等の石器類、人骨、糞石、動物の骨、魚類の骨、貝類、

種子類、焼土塊など多種多様のものがあり、それらは縄文時代中期初頭から後期初頭に属するものである。

出土する石器の石鏃や石錐などに使用されている材料のうちサヌカイトは、肉眼観察では、二上山周辺に産するサヌカイトが大半を占め、一割程度が他地域産のものと推察される。

石鏃は五〇〇点以上出土しており、一点のみチャート製で他は全てサヌカイト製である。平面形態は、基部の形により凹基無茎式・平基無茎式・円基無茎式・凸基無茎式の四形態に大別できる。出土量は、凹基無茎式八九%・平基無茎式二%・円基無茎式三%・凸基無茎式一%・形式不明六%の比率である。

石錐は二〇〇点以上出土しており、全てサヌカイト製である。頭部や錐部の形状は、バラエティーに富ん



写真4 讃良川遺跡出土縄文土器

でいる。

石匙は一〇〇点以上出土している。平面形態は、刃線がつくり出し（茎）に対してほぼ直交する横型、ほぼ平行する縦型、その中間型に大別される。縦型は横型に比べてつくりが粗雑である。出土割合は、横型二七％、縦型六五％、中間型八％であり、縦型の占める割合が大きい。

石鍬は長さ一五・九センチ、刃部幅六・九センチ、厚さ一・一センチでサヌカイト製のものが一点出土している。

石斧は磨製と打製のものが出土しているが出土量は少なく、そのほとんどが欠損している。打製のものの比率が高い。

石皿は完形のもの少数で、ほとんどは破損した状態で出土している。

台石は、平面形態は約二〇センチのほぼ円形で、断面は楕円形を呈している。一面は中央部に打撃痕がありやや窪んでいるものの平坦で、反対面は凸面を呈している。両面とも無数の不定方向の傷（打撃痕）があり、とくに平坦面に多くみられ、台石に対して垂直ではなくやや斜めに当たっている。石材は砂岩である。

敲石・磨石は、側面あるいは平坦面に敲打痕あるいは擦り痕がみられるもので、一〇〇点以上出土している。平面形態は、円形あるいは

長楕円形を呈している。石材は、砂岩が七五%を占め、次に花崗岩で一四%、残り一一%がその他の石材となっており圧倒的に砂岩の占める割合が大きい。

錘は石製のものと土製のものが出土している。

石錘は、総数で一三三点出土している。縄かけは、打ち欠きと切り目の二種類が出土している。打ち欠き石錘は七二点出土しており、平面形態は、幅が狭く、細長い長楕円形、断面は板状あるいは不整な楕円形を呈するものが大半を占める。打ち欠き部は、上下では大きさの異なるものがほとんどである。完形品の長軸は三・六―一二・六センチ、短軸は二・一―九・四センチ、重さ七・五―四四・一六グラムで一五―四五グラムの範囲のものが最も多い。四四・一六グラムで本遺跡出土の石錘で最大の重量を有するものは、縄かけの打ち欠きが四箇所に見られる。石材は、砂岩が四〇%を占める。切り目石錘は六一点出土しており平面形態は、幅が狭く、細長い長楕円形、断面は板状あるいは不整な楕円形を呈するものが大半を占める。完形品の長軸は四・三―九・一センチ、短軸は二・六―五・七センチ、重さ一四・七―八五・三グラムで一五―五〇グラムの範囲のものが最も多い。石材は、粘板岩ねんばん・泥岩でい・砂岩が大半を占める。切り目石錘は、船元Ⅱ式に相伴して出土している。

土製品としては、土器片錘、円盤状土製品と耳栓がある。

土器片錘は土器を適当な大きさに打ち欠いてつくったものであり一六〇点確認でき、うち完形品は一二九点ある。縦の長さ二・一―九・八センチ、横の長さ二・五―八・〇センチ、厚み〇・五―一・三センチ、重さは六・一―七四・六グラムを測り、重さは一〇―二〇グラムと二〇―三〇グラムの数値帯がそれぞれ全体

の三二%の割合を占める。形状は縦長・横長・正方形・円形・不整形な四角形等であり、土器底部を使用したものもある。縄かけは、ほとんどが打ち欠きであるが、切り目、十字がけのものが各一点出土している。使用されている土器片は、船元Ⅰ式Ⅲ式のもので、赤彩の残っているものもある。

また、土器片錘と同じように土器片の周辺を打ち欠いて成形した形状で縄かけ打ち欠きのない円盤状の用途不明土製品も多数出土している。

石錘および土器片錘の出土状況から讃良川の縄文人たちは網を使った漁法で海の幸を手に入れていたと考えられる。

耳栓は、七点出土している。大きさは長さ一三～二四ミリ、径一九～二九ミリのもので、形態は、胴部中央にくびれを有する臼形のものである。文様が施されているものと無いものがある。さらに、中心部に貫通する孔を有するものと無いものがある。赤彩が施されているものもある。現在のピアスのように耳朶なみに孔をあけて付けていたと考えられる。

骨角器としては、ヤス・釣り針があるが数点である。装飾品としては、サメの歯・小動物の歯・イノシシの牙の垂飾りがある。出土している骨は、陸上動物の哺乳類ではイノシシ・ニホンジカが大半を占め、ニホンザル・タヌキ・ノウサギ・ヘビ、鳥類ではサギ・カモ、魚類では淡水のコイ・フナ・ナマズ・カエル、海のクロダイ・ヘダイ・ボラ・スズキ・フグ・サメ・トビエイ・ウミガメ・コチ・ギギ・マグロ・イワシなどである。

四 クリの貯蔵穴

めずらし 貯蔵穴は、北東方向に傾斜している斜面を降りた平坦面で、形態の異なるものを大小二カ所
い貯蔵穴 ずつ四カ所発見した。

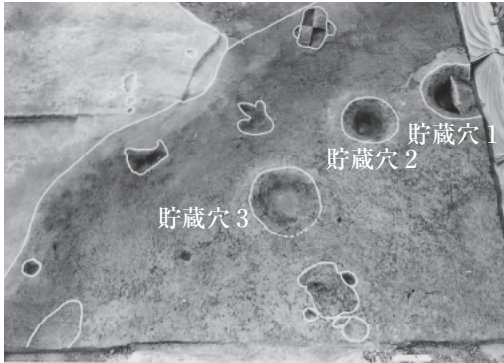


写真5 讃良川遺跡出土貯蔵穴群

貯蔵穴1は、入口の直径二・一メートル、深さ一・三メートルあり、円形で袋状を呈しており、内部には縄文土器や獣骨などとともに厚さ五〇センチほどの貝層がみられた。貝層は上下二層に分かれ、上層が淡水産のセタシジミ・ヤマトシジミ、下層は汽水から海水産のマガキがまとまって堆積していた。さらにその下層（最下層）で貯蔵のために入れられていたクリを発見した。このことによりこれらの穴が貯蔵穴であることが明らかになった。貯蔵穴の入口周辺には、幅一・一―一・三メートル、最大高二〇センチほどの黄色粘質土の土手状の土の高まりがみられた。貯蔵穴2は、入口の直径一・九メートル、深さ〇・七メートルの円形で袋状を呈している。貯蔵穴3は、入口の直径二・三メートル、深さ〇・六メートルで、円形で浅い皿状を呈している。貯蔵穴4は、楕円形の入口をもち、長軸三・四メートル、短軸二・五メートル、深さ〇・四メートルの浅い皿状を呈している。貯蔵穴4を除いたそれぞれの貯蔵穴の入口周辺には、幅約〇・四―一・三メートル、高さ八―二〇センチほどの黄色粘質土の高まりがリング状にみられた。土手状の高まりは意図的に構築され

第二章 黎明期の寝屋川市域

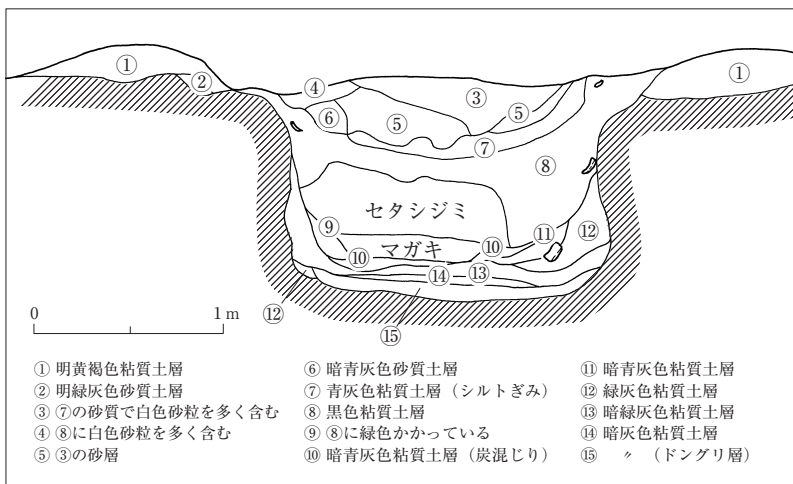


図12 讀良川遺跡出土貯蔵穴1断面図

ており、貯蔵穴周辺の地山を単に盛上げたものではなく、他所からわざわざ黄色粘質土を持ち運んできている。このような遺構は他に類例がなく、貯蔵穴の構造研究に新たな資料を提供するものである。これらの貯蔵穴の内部からは縄文土器や獣骨・魚骨等が出土しており、貯蔵穴はその機能を失った後、「ごみ穴」として使用された。

五 縄文文化の終焉

縄文時代 縄文時代の終わりは、次の弥生時代との出会いの終わり
いである。狩猟採集を生活基盤においていた

縄文時代と、水田稲作農耕を生活基盤におく弥生時代との文化的差異には大きなものがある。

一万年以上も続いた縄文文化には、時間的な変化と南北に長い日本列島における地域的な違いが当然生じている。

東の縄文社会では、定住が確立した早期後半から前期以降、中期後半に最盛期を迎え、後期・晩期において、集落は激減する。定住を完成させる一方で狩猟採集生活の限界

的狀況にあり、生活の内容も質も以前とほぼ同じ状態で、文化の新たな展開はみられなくなり停滞要素の強い時代であったのであろう。

これと対照的に近畿地方以西の地域では後期以降に集落が増え、とくに九州地方においても、後期後半から環状集落をつくって定住生活を送るようになってきた。また、大阪湾沿岸地域においては後期以降の縄文時代の遺跡数は急激な増加が顕著にみられる。

列島に稲作がはいつてきた時期については、まだまだ研究と議論の必要がある。例えば岡山県と縄文人

南溝手遺跡・倉敷市福田貝塚出土の粃圧痕付き土器は縄文中期のものといわれ、同じく岡山県総社市市風張遺跡からは炭化米が出土している。これは縄文後期に該当する住居跡からの出土である。このように縄文時代にイネの存在は確実なものとなっているが、それが水稻なのか陸稻なのか、どこからきたのかを検討する必要がある。

水田稲作は列島に水田稲作文化が受容されて一〇〇年も経たないうちに、本州北端の津軽半島まで伝播した。それは、縄文社会の伝統的な生産活動である狩猟・採集活動の限界、自然環境の変化が水田稲作農耕を受容させたのである。

本市域では、滋賀里Ⅲ（粃痕跡）・Ⅳ式の土器を出土する長保寺遺跡、縄文時代晩期後半の船橋式・長原式の突帯文土器とつたいもんの一群を出土する高宮八丁遺跡がちょうどこの縄文・弥生両時代の交差する時期にあたる遺跡である。遺跡の詳細については両遺跡とも土器の出土が少量であったり、遺構等が不明であるので明らかで

第二章 黎明期の寝屋川市域



写真6 讃良郡条里遺跡出土の畿内
最古の弥生土器
(財大阪府文化財センター提供)

はないが、河内湾東北部において水田稲作農耕の動きがみられるのは確実である。

最近の形質人類学の研究から北部九州で発見される縄文時代晩期や弥生時代早期の人骨には縄文的形質を多くもっていることが明らかになりつつある。また、現在は北部九州や近畿地方において渡来系の人と判定される人骨の出土は少なく、今後の資料の蓄積をまたなければならぬが、水田稲作農耕の先進地帯であるといわれている瀬戸内・近畿地方においても、稲作農耕を受容していったのは在地の縄文人であったといえよう。列島各地に住んでいた縄文人が、大陸からのさほど多くない渡来人の文化の影響を受け、農耕社会へと移行発展していったのであろう（岡村道雄『日本の歴史』第一巻 縄文の生活誌 改訂版 講談社 二〇〇二年）。

しかし、これらを実証するためにはまだまだ多くの検証をし、事実を積み重ねていかなければならず、考古学における課題は多く存在している。

第三章 稲作の始まり

第一節 潟湖畔の高宮八丁遺跡

一 稲作のルーツ

注目あびる長

縄文海進の最盛期には海が京阪電鉄寝屋川市駅の北方約五キロ付近まで入り込んでいた。

江中・下流域

その数千年後になると、水域は縮小し大阪湾と接する一部を除き淡水域化していた。河

内潟^{ちがた}の誕生である。寝屋川市駅の南西一キロの木田元町付近まで陸化が進み、市立中木田中学校の西側一帯には間もなく稲作にかかわるムラが営まれるようになる。河内潟^{ほとり}の畔^{ほとり}には、近畿地方でもっとも早い段階の弥生ムラが出現する。

さて日本型（ジャポニカ）の稲の起源地と栽培開始の時期について、第二次大戦以前には中国華中の河南省^{めんちやんシヤオ}滎池^{めんちやんシヤオ}県^{ヤンシヤオ}仰韶遺跡^{ヤンシヤオ}が知られていた。中国考古学のバイオニアのひとりでもあるスウェーデンの地質学者アングーソン（一八七四―一九六〇）が大正十年（一九二二）に発見し、のちに糊^か庄^{ぼと}痕をもつ土器と報告した前三〇〇〇年頃の例（約半世紀後に紅焼土塊と判明、佐藤敏也『日本の古代米』雄山閣 一九七一年）が知られていたが、昭和四十八年（一九七三）以降、長江河口付近の浙江省河姆渡遺跡^{かぼと}で約七〇〇〇年前の大規模な水田稲作遺跡が発見され、一九八〇年代には長江中流域の河南省^{ほうとうぎん}彭頭山遺跡・湖北省^{じょうほく}城背溪遺跡^{じょうはいけい}でさらに一〇〇

第三章 稲作の始まり

○年以上さかのぼるジャポニカ種の稲作遺跡が発見されるなど、今では長江中・下流域が注目されるようになった（厳文明「世界最古の土器と稲作の起源」『季刊考古学』第五十六号 雄山閣出版 一九九六年）。

日本列島で日本型の稲を栽培することが始まった弥生時代は、日本文化の成立期である。日本文化の基調としての稲作農耕が始まったのである。今日に伝えられている農耕儀礼や日本語・機織り技術などもこの時代にさかのぼると思われる。長江下流域から東シナ海経由で、無文土器時代（青銅器時代）の朝鮮半島にもたらされた稲作農耕が、それから数世紀を経て中国が春秋末・戦国の時代を迎え、東アジアの政情が不安定になった頃に北部九州に伝えられた。すなわち無文土器時代中期の朝鮮半島南部の稲作農耕民たちが、玄界灘を渡り移住して来たことによって、北部九州に日本列島最初の稲作文化が伝えられたのであろう。

そして弥生文化を構成する稲と農耕具、石庖丁^{いしぼうちょう}や太形蛤^{ふたがたはまぐり}刃石斧^{ばいもんどき}・抉入柱^{えぐりいりちゅう}・柱状片刃石斧^{ちようじょうぺんいしけん}・扁平片刃石斧（一卷一七七・一八〇～一・一八三～四・一九七～二〇三頁）などの大陸系磨製石器、多鈕細文鏡^{たちゅうさいもんきやう}や銅鐸などの青銅器、住居や集落形態など様々な文化要素が、朝鮮半島南部から北部九州にもたらされ、これが近畿地方にやや後れてもたらされた。

水とのた 当時の河内平野は河内潟の水域が広がり、この潟湖の周辺や大阪湾の沿岸に最初の弥生集落が
たかいた 出現している。畿内弥生時代前期古段階の土器をもつ集落遺跡として、大阪湾岸では尼崎市上

ノ島や堺市四ツ池があり、河内の潟湖畔では本市の高宮八丁・四條畷市雁屋^{かりや}・東大阪市鬼虎川^{きこがわ}・八尾市く東
大阪市の山賀などがある。

河内の潟湖畔^{せきべ}に営まれた低湿地のムラの中には、大和川水系の楠根川や玉串川などの氾濫原の中に立地す



写真7 高宮八丁遺跡出土の壺（弥生前期中段階）

るものがある。大遺跡として学史に名を留めた東大阪市瓜生堂遺跡は、標高一メートル未満の低地に前期の生活面があり、中期はじめの大氾濫によって一メートル以上の土砂に埋もれてしまい、再びムラは復活するものの中期末わり頃の氾濫はすさまじく、運ばれて来た土砂は二メートル以上に達し、人びとはムラを棄ててしまう。

淀川水系では水害で埋もれた弥生ムラは発見されていないが、河川の規模や水量、そして仁徳紀などが伝える治水伝説、歴史上の洪水記録などから推定すると、大和川水系よりも水とたたかう弥生の日々は悲惨であったと思われる。江戸時代の享和二年（一八〇二）六月に降り始めた豪雨で、茨田郡葛原村の堤防が七月に決壊した洪水は「点野村切所一件留」などに記録されている（東光治編『河内九個庄村郷土誌』）

九個庄村役場 一九三七年 二四一〜五一頁）。この時のすさまじい寝屋川・門真・守口一带の洪水被害の記録は、心斎橋筋の扇子屋小橋屋宇兵衛が絵筆をふるって記録した「榎並八箇洪水記」上下二冊に、まるでテレビの報道記録のように記録されている。たまたま京都にきていた滝沢馬琴もこの水害の状況を随筆『羈旅漫録』に書いている。

二 縄文と弥生の接点

環濠集落

近畿地方で、稲作農耕伝播当時の様子をよく伝えていると思われるのは、紀伊水道に面した御坊市の堅田遺跡^{かただ}である（久貝健「和歌山県御坊市堅田遺跡の弥生時代前期環濠集落跡」『考古学雑誌』第八五巻第一号 一九九九年）。日高川河口に近い海拔約二メートルの低地に三重の環濠^{かたう}をめぐらせていたこの遺跡は、弥生時代前期末にはなぜか消滅してしまっていたが、畿内弥生前期古段階土器と縄文晩期末の土器にともなって朝鮮系の無文土器が出土している。また環濠内で発見された一七棟の竪穴式住居のうちの四棟は、韓国忠清南道扶余郡松菊里遺跡^{しょうきょくり}に特徴的な松菊里型の住居址であった。さらに今のところ国内最古の青銅器の工房跡（畿内前期中段階以前）が検出され、国内最古の弥生前期（畿内前期新段階）青銅器鑄型（ヤリガンナ砂岩鑄型）が出土している。この鑄型は、別の鑄型として使用したものの再利用品であった。なお松菊里遺跡は紀元前六～五世紀の遺跡で、銅斧の鎔范^{ようはん}（以下、鑄型とする）や大量の炭化米、そして特色ある形態の無文土器や竪穴式住居などで注目されている（韓国国立中央博物館『松菊里Ⅰ』一九七九年）。

集落をめぐめる環濠^{かんこう}は弥生集落にはつきものと言えるが、韓国では無文土器時代前期の遺跡にすでに認められ、無文土器時代中期の松菊里の頃になると、間もなく北部九州に日本列島で初めての環濠集落が出現することになる。この次々に海を渡ってきた新来の人びとが伝えた稲作農耕文化の総体が、北部九州から瀬戸内や大阪湾岸・河内潟湖畔へ、さらに畿内から東海へと伝えられ本州の北端までに波及したのである。

本州北端まで広がったコメ作り

西暦紀元前後の青森県南津軽郡田舎館村^{いなかだて}垂柳遺跡^{たれやなぎ}では、国道バイパス予定地内から、整然と並ぶ水田跡六五六枚、弥生土器、水田跡に残る一五八六個の老若男女の足跡などが

第一節 潟湖畔の高宮八丁遺跡

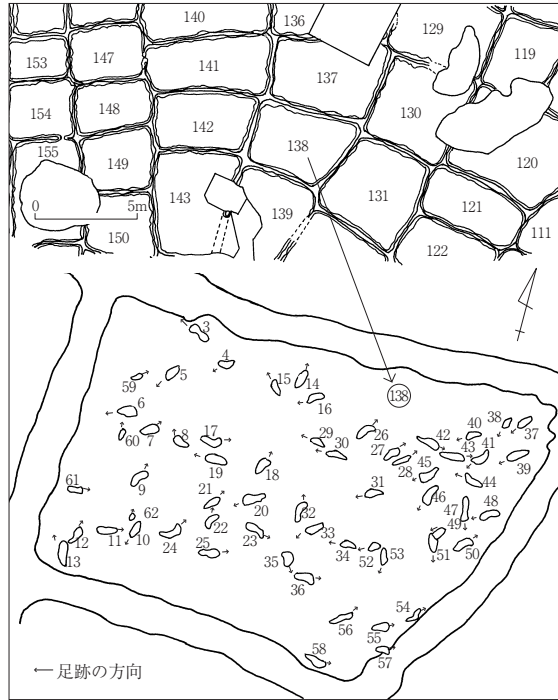


図13 垂柳遺跡の水田跡

備考：『垂柳遺跡発掘調査報告書—昭和59年度』第18図・第55図より作成

伝えられた稲作は、想像以上に早いスピードで、津軽や八戸・下北の地まで波及していったらしいといわれる所以である。

弥生時代の稲作農耕の南方への伝播は、考古学的には九州南端までである。弥生土器自体は沖縄本島まで及んでいるが、薩南諸島・奄美諸島・沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島において、稲作を物語る遺跡は発見されていない。

見つかっている（青森県教育委員会『垂柳遺跡発掘調査報告書—昭和五十九年度』一九八五年）。青森県つがる市の亀ヶ岡遺跡は、東北地方縄文晩期土器の総称としての亀ヶ岡式土器である。弘前市砂沢遺跡の砂沢式土器は、東北における最後の縄文土器とも最初の弥生前期土器ともいわれ、稲痕が付くものもある。太平洋側の八戸市松石橋遺跡からは弥生時代前期の土器が出土している。畿内に

第三章 稲作の始まり

農耕用の木製の鋤などを準備し、灌漑施設を持つ水田をひらき、そして種籾まきの春から秋の収穫に至るまでの稲作技術の総体は、決して生やさしいものではない。農耕に伴うカミまつりなど、いろいろな儀礼までを含めた稲作農耕文化のいっさい（総体）が、そっくりもたらされたことであろう。種籾が手に入ったからといって、経験のない者にすぐにコメづくりができるわけではないのである。このように見えてくると、瀬戸内や大阪湾にもまた外洋にも通じる御坊市堅田遺跡に、弥生文化をもたせた人びとの出自をふくめて、畿内における稲作農耕文化開始の頃の様でなく多様な文化伝播の様相が彷彿としてくる。

稲作開始 の暦年代

日本列島における稲作農耕の開始すなわち弥生文化の始まりは、北部九州に環濠集落や水田遺構をはじめとする稲作に関わる遺物類の出現する前五世紀頃とみるのが一般的である。これでも旧来の見方に比べると、数世紀さかのぼって古くなっている。

考古学的な年代を暦年代にあてて試みの一つで、近年注目されているのが、遺跡出土の建物の柱根などを資料とする年輪年代法である。大阪湾沿岸の環濠集落として知られる和泉市池上曽根遺跡出土の弥生時代中期後半（畿内第四様式）の柱材は、平成八年（一九九六）に紀元前五二年の年輪年代測定数値が報告された。これはこの柱材となった樹木の伐採年が紀元前五二年と測定されたわけであるが、この年代はそれまでの畿内における弥生中期後半の暦年代観を一世紀以上さかのぼらせるものである。当時の学会の常識的な年代観からみれば衝撃的なもので、そのために池上曽根事件と評されることもあった。しかし今では、畿内弥生時代の暦年代を考える上で注目されるようになってきている。

なお弥生時代の開始の暦年代について、北部九州の初期の稲作遺跡出土の土器に付着していた炭化物など

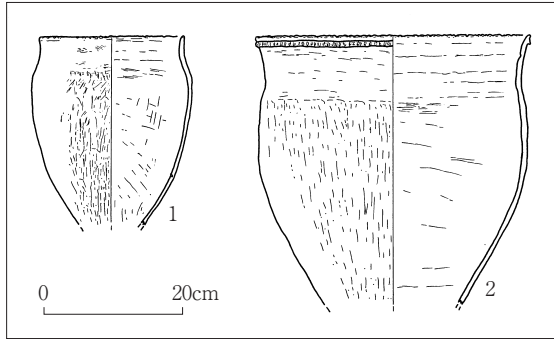


図 14 長保寺遺跡出土の縄文土器深鉢

の¹⁴Cを、AMS（加速器質量分析）法を用いて測定したものを、世界的な規模での年輪年代データと照合した研究成果がその後発表され、マスコミでも大々的に報じられた。これは弥生時代の開始をさらに約五百年さかのぼらせて前十世紀としたものである。今後当分の間は、この問題についてのとまどいと驚きが続きそうである。これでいくと日本と朝鮮半島との年代ギャップがなくなり、また稲作の北部九州から東北地方への伝播もゆつくりということになりそうであるが、これが歴史の真実なのかについては、まだまだ将来の検討に待たなければならないことが多いすぎるといわねばならないようだ。

長保寺の縄文

土器に糊痕

縄文時代晩期末に煮炊き用に使った土器の破片に、炭化した穀類のキビが付着しているものが、琵琶湖東岸の安土町（竜ヶ崎A遺跡・平成十八年調査）で見つかっているが、稲作の開始される頃にキビの栽培・食用が同時的に行われたことを示している。キビなどの雑穀を栽培することが行われるようになっていた縄文時代晩期末の人びとが、稲作農耕を受け入れたのであろうか。

おびただしい量の木製品などが出土した高宮八丁遺跡（一巻一〇五―二二九頁）は、広大な河内の潟湖北東部に流入していた寝屋川河口付近の低地に営まれた大弥生集落で、炭化米やヒョウタンなどの栽培植物の種子が見つかっている。その数百メートル南西に隣接する長保寺遺跡では、琵琶湖の湖西南部を標識とする縄

文時代晩期前葉の滋賀里Ⅲ式期の深鉢の破片に粉の圧痕が付いており、この滋賀里Ⅲ式に後続する深鉢でその口縁や胴部に突帯を巡らせた晩期後葉ははじめの滋賀里Ⅳ式を伴っていた。高宮八丁遺跡からもこの滋賀里Ⅳ式など、縄文時代晩期の刻み目突帯を口縁部や胴部にめぐらせる深鉢数種が出土している。長保寺遺跡は、弥生時代の全期間にわたる土器類が出土しており、先の粉痕をもつ縄文時代末の土器はこの遺跡がいち早く稲作農耕の時代に入っていたことを示すものであろう。

本市と四條畷市の接するあたりを西流して潟湖に注いでいた讀良川沿いには、注目される遺跡がいくつも発見されている。縄文後期の大阪を代表する遺跡として知られている更良岡山遺跡からは、晩期前半の近江的な滋賀里式と、晩期後半の河内的な船橋式の深鉢が出土している（堀田啓一「縄文遺跡と土器の文化」『大阪府史』第一巻 一九七八年）。これらは潟湖北東畔の高宮八丁から雁屋遺跡に及ぶ、北河内の旧讀良郡地方でのいち早い弥生ムラの成立当時の様相を示唆しており、畿内における稲作開始を考える上で重要である。ややくれて兵庫県伊丹市口酒井・大阪市長原出土の晩期末土器にも粉圧痕がある。また高宮八丁遺跡の南方約一〇キロ、潟湖南西付近の東大阪市鬼塚遺跡からは、縄文時代晩期末の土器（船橋式土器の深鉢）と弥生時代前期の壺がいっしょに出土している。

三 米とドングリと

見つかった稲のプ 高宮八丁遺跡は環濠集落の一部が発見され、弥生時代の木製の鋏・鋤・堅杵や、糸を紡ラントオパール ぐ土製の紡錘車や木製の機織り道具、潟湖に小舟を漕ぎだすための櫂などが出土し、当

時のムラびと達の暮らしの一端を垣間見せている。水田や住居や共同墓地などの遺構は明確ではないが、潟湖側の低湿地で水田の可能性を示す稲のプラントオパールが検出されており、また住居については竪穴式住居は発見されておらず、高床の住居跡の建替えを思わせる柱穴群が検出されている。低湿地に居住するには快適な掘立柱の高床建築が、倉庫としてだけでなく住居としても用いられていた可能性がある。昭和四十二年（一九六七）頃、千里川と猪名川とが合流する氾濫原の標高約六メートルの豊中市勝部遺跡^{かつべ}では、弥生前期～中期に属す多くの柱穴や土坑がみられたが、竪穴式住居は検出されず、高床式建物としての復原も困難であったが、高宮八丁遺跡とどこか類似していると感じたことがある。潟湖南岸中央部付近で、洪水による膨大な土砂に埋没していた瓜生堂遺跡^{うのしょうどう}の上流（楠根川）約一キロの山賀遺跡の前期土器は、壺の頸部と胴部の間に段をもつという特徴があり、東大阪市と八尾市にまたがる前期古段階の弥生土器をもつムラとして話題となった集落遺跡で、瓜生堂遺跡に先行してムラを営んでいた。埋没したこの遺跡の北と南の調査区から、弥生前期の水田の畦畔^{けいはん}や用水路やヒトの足跡が見つかっていて、今のところ河内低地で最初に稲作を始めたムラかと見られているが、住居跡は高床式の掘立柱建物群であった。

百面以上の前期水田が検出された滋賀県守山市服部遺跡は、近江太郎の異名をもつ野洲川^{やす}流域の大遺跡で、未検出の水田跡はさらに数百面が地下に包蔵されていると思われるが、墓域の下層から縄文晩期末の船橋式土器の甕や、河内（生駒西麓^{たんど}）胎土^{たんど}の壺の頸部と肩部の間に削り出しの突帯をもつ弥生前期中段階の土器が出土している。河内とのかかわりを物語るものである。

なお前期の水田の跡は、神戸市須磨区戎町遺跡や同東灘区本庄町遺跡からも発見されている（森岡秀人・

村川義典「撰津国」村川行弘編『兵庫県の考古学』吉川弘文館 一九九六年。

さてプラントオパールとは、イネ科植物だけがその葉身に大量に作りだすガラス状の珪酸体が、土壤中に残存しているものをいう。藤原宏志らの研究によって種類の多いイネ科植物の細判別が可能になったもので（藤原宏志「プラントオパール分析による古代栽培植物遺物の探索」『考古学雑誌』第六二巻第二号 一九七六年）、稲をはじめとするイネ科の穀物農耕の開始・存在を探る有力な分析法である。なお本市付近で弥生時代の水田跡は、高宮八丁遺跡南方約三キロの潟湖東縁北部にあつて、弥生時代の全期間の長期にわたり存続した四條畷市雁屋遺跡で発見されている（四條畷市教育委員会『府立四條畷保健所改築工事に伴う雁屋遺跡発掘調査概要』一九九四年）。

寒冷な青森県垂柳^{たれやなぎ}遺跡で六五六枚の弥生水田が発見されたことは、従来の作物学の常識からは考えられないことであり、考古学や古代史にとってもショッキングなことであつた。六五六枚の水田は、これでこのムラの全てというわけではなく調査区域外にさらに広がるといえ、検出された水田面積は三九六七平方メートルで約四反歩にすぎない。広大な水田跡が見つかっている弥生後期の静岡県静岡市登呂遺跡でも、約七万平方メートル（約七町一反）で、とても毎日の米食をまかなうことなど困難である（村川行弘・瀬川芳則・岡田保造『倭人の時代』清文堂 一九八〇年）。

ドングリピット 高宮八丁遺跡で貯蔵穴のひとつ（直径約九〇センチ）から大量のドングリが発見されている（一巻八〇七頁図版二二）。水にさらしてアク抜きして、食用にしたものである。他の

一基の貯蔵穴からも少量のドングリが見つかっている。ともに弥生前期中葉から前期末の遺構であつた。河

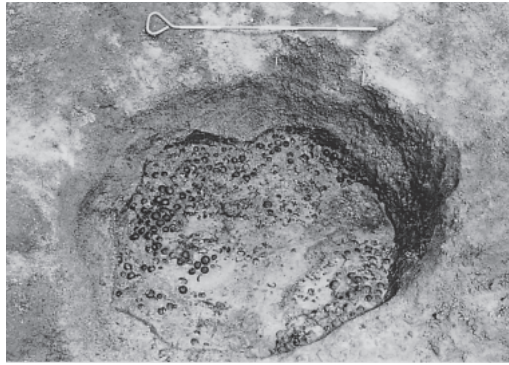


写真8 高宮八丁遺跡のドングリ貯蔵穴

内でドングリをたくさん貯蔵していた弥生遺跡としては、初めての例である。同じ頃の大和では、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡で直径一メートルほどの楕円形のドングリピット内に、カシ・シイ・コナラがバケツ一杯分あったという（寺沢薫・千賀久『日本の古代遺跡』5奈良中部 保育社 一九八三年）。

弥生遺跡からクリ・ドングリ・シイ・トチの実やモモの種などが発見されることは、前代以来のことである。縄文晩期の岡山県赤磐市南方前池遺跡では、乾燥の良い台地に直径約一メートル・深さ約一メートルの貯蔵穴が十数カ所あり、それらの中にはドングリやトチをぎつしり詰め込んだ上に木の葉や枝などをかぶせて、冬期の食糧備蓄をしていたことを示すものもあった。

弥生時代の北部九州や本州西端では、前期から中期にかけて断面形がフラスコ状になる袋状貯蔵穴が群れをなして発見される例が知られている。福岡県小郡市津古内畑遺跡からは、前期後半から中期初めの二六四年）。ただし高宮八丁遺跡の場合は、こうした高燥なイメージとは異なり、常時水が湧いている井戸状のアク抜き用遺構であると思われる。ともあれドングリ・クリ・シイ・クルミ等は、前代以来の大切な保存食糧であった。

第三章 稲作の始まり

たとえば長野県諏訪郡富士見町の八ヶ岳南山麓で発見された烏帽子・藤内遺跡の縄文中期の第九号住居址は、おそらくは雪の積もった状態の時に、火災で倒壊して自然鎮火しそのまま放置されたと思われるものであったが、クリばかりが堅穴式住居の床一面に五〇センチほど堆積していた（藤森栄一編『井戸尻』中央公論美術出版 一九六五年）。天井に置かれていたたくさんのクリが落ちて来たらしい（藤森栄一『縄文の世界』講談社 一九六九年）。私は冬の保存食糧として、美味なクリの実ばかりが選ばれていることに驚くとともに、縄文のクリ林の形成と維持を思ったことがある（瀬川芳則「縄文人の暮らし」前掲『倭人の時代』）。

遺跡出土の食資源 参考までに当時の食資源を、潟湖の湖畔付近の遺跡出土資料から見ておこう。潟湖の南岸では、

サクラ類・モモ・トチノキ・サンショウ・ブドウ類・ヒシ・フクベ・マクワウリ・イネがある。栽培していたと思われるのはイネ・フクベ・マクワウリ・モモである（粉川昭平「瓜生堂遺跡出土の植物種子類」『瓜生堂遺跡Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会 一九七三年）。

河内平野に広がっていた水域が、海水から淡水へと大きく環境を変化させる中での、人びとの食生活を垣間見せてくれているのが、潟湖西岸の大阪市中央区森の宮遺跡の大貝塚である。下層の海産のカキの貝層から淡水産のセタシジミの貝層に変化した上層の貝塚には、膨大な量のセタシジミの他に、イノシシ・ニホンジカ・コウベモグラ・ニホンザル・ノウサギ・ムササビ・ネズミ・タヌキ・イヌ・テン・アナグマ・鳥類・スッポン・ヘビ類・カエル類・コイ・ニゴイ・キンブナ・ナマズ・カワニナ・オオタニシ・カニ類などの遺体が含まれていた（樽野博幸・石井みき子「森の宮遺跡出土の動物遺体・第3次調査」『森の宮遺跡第三・四次発掘調

査報告書』難波宮址顕彰会 一九七八年）。森の宮の弥生人たちの場合は、眼前（東）は潟湖であるが低平な上町台地を西に越せば大阪湾であり、ハモ・スズキ・ボラ・クロダイ・サワラ・ヒラメ・サメ類・ハイガイ・ハマグリ・サザエ・マガキ・ウニ類などの海の魚介類も結構食べていた。高宮八丁遺跡の弥生人たちにとっても、海の幸を入手するのはさほど困難なことではなかったことであろう。後出の東大阪市鬼虎川遺跡では、弥生前期～中期前半の貝塚からセタシジミやタニシの他に、ハマグリ・アカニシ・マガキや獣骨類が出土している。

四 北陸産のヒスイの勾玉

特色ある物流

高宮八丁遺跡の弥生ムラの特色のひとつに、木製農耕具の製作がある。前期中頃から前期終わり頃まで使用された溝内貯木遺構が発見されており、製作途中の未成品などが出土している。出土の木製品には、北部九州の初期稲作を示すものと注目されてきた佐賀県唐津市菜畑なばたけ遺跡に、類品のあるものがあり興味深い（唐津市教育委員会『菜畑』一九八二年）。

溝内貯木遺構を備えていたこと、製作途中の諸工程を示す遺物のありようは、鋤をはじめとする木製品を他のムラに供給していたことを物語るものに他ならないと思える。類似の遺跡としては鬼虎川遺跡きとらがわが、南約九キロの潟湖の南東畔にある。潟湖畔には鬼虎川遺跡の南西約四キロの草原状の低地に立地した瓜生堂遺跡のように、木製品を製作した状況が認められないムラもあり、保存食としての貝の干物などを大量に生産していた森の宮遺跡もあった。

なお、高宮八丁遺跡の中期初めの土器の中には、摂津や大和や生駒西麓（中河内）産の他に、近江地方をはじめ播磨・山城・東海などの特徴を持つものが少なからずあり、当時の地域間交流の一端を物語るものである（一卷一二〇頁）。

ヒスイの産地

遠来の出土品の一つに、新潟県糸魚川市の姫川流域に産するヒスイ（翡翠）で作られた美しい勾玉がある。不思議な色あいを秘めたヒスイは、縄文前期までさかのぼって装身用の垂玉・勾玉などに加工された硬玉（軟玉に比し硬度が高い）で、太平洋戦争勃発の頃には、ごく一部の地質学者を除き原石の産地すら知られていなかった。糸魚川支流の姫川のさらに支流の小滝川の渓谷で発見されたヒスイが、論文となり昭和十四年（一九三九）に専門誌に掲載され（河野義禮「本邦に於ける翡翠の新産出及其の化学性質」『岩石鑛物鑛床學』第二二巻第五号）、これを旅順工科大学地質学教室小倉勉を訪ねた考古学者の島田貞彦が知り、考古学会に報告したのは昭和十六年（一九四二）、太平洋戦争開戦の半年前のことであった（島田貞彦「日本発見の硬玉に就いて」『考古学雑誌』第三一卷第五号）。その後ヒスイの原産地は、鳥取県・岡山県・長崎県でも発見されたが、日本の古代遺跡からの遺物ヒスイの産地同定の分析が藁科哲男らによっておこなわれた結果、糸魚川の上石が北海道から九州まで伝播していることが判明している（東村武信『改訂・考古学と物理化学』学生社 一九九〇年）。

縄文系勾玉

玉や玉斧

高宮八丁遺跡のヒスイの勾玉は、加工の際にできる原石の破片などを伴わず、弥生前期の包含層から出土したものである。古墳時代になると前期古墳の副葬品の中に見かけるようになるが、弥生時代前期のヒスイ勾玉は、近畿でも雁屋遺跡の東約一キロの四條畷市城遺跡（桜井敬夫・佐野喜美・野

島稔『わたしたちの四條畷』四條畷市（二〇〇六年）に出土例があるのみである。さらに言えば本例（二巻一五二頁図九二）と城遺跡例を除き近畿以西では、山口県・福岡県・佐賀県・熊本県に出土例があるのみである。弥生時代の中期・後期になると、大阪では高槻市安満遺跡^{あま}・和泉市池上曾根遺跡・大阪市旭区森小路遺跡で発見されているが、北部九州では王墓級の支配層の弥生墓に副葬されたりしている。ヒスイの勾玉は弥生のムラが容易に入手できないものであった。高宮八丁遺跡と城遺跡の勾玉の形状は、縄文系勾玉と分類されるもので、類例は山口県下関市綾羅木郷遺跡^{あやらぎこう}・福岡市吉武高木遺跡^{よしたけたかぎ}・佐賀県唐津市宇木汲田遺跡^{うきんでん}などにある。



写真9 高宮八丁遺跡出土のヒスイ製勾玉



写真10 四條畷市城遺跡出土のヒスイ製勾玉



写真11 四條畷市
更良岡山遺跡出土
のヒスイ製斧

写真10～11
四條畷市立歴史民俗
資料館提供

これらの縄文系勾玉は、姫川流域すなわち越^{こし}で作られていた勾玉がもたらされたものであろう。なお、本市小路明和公園の南約二百メートル、讃良川左岸の四條畷市更良岡山遺跡から、高さ七・五センチの縄文後期のヒスイの石斧が発見されている（前掲『わたしたちの四條畷』）。製品としてのヒスイは、その多くが大珠・勾玉・垂玉^{すゞ玉}であつて、単なる装身具というのではなく、特別な人物が頸や胸に垂らして神事などに役立てたと思われるが、ヒスイの斧すなわち玉斧^{ぎょくふ}は少ない。讃良川河畔の縄文の玉斧と弥生の縄文系勾玉は、当地域と越の地域との永い結びつきを示している。なお高宮八丁遺跡出土の中期の土器の中に、近江や北陸や摂津・中河内などからもたらされたものがあるが、生駒山地西麓扇状地で潟湖（梶山彦太郎・市原実『続大阪平野発達史』古文物学研究會 一九八五年）畔の大東市中垣内遺跡（関西電力大阪変電所内）でも、前期後半を中心とする土器の中に近畿北部や山陰・山陽からの外来のものが認められている。

第二節 丘の上の太秦遺跡

一 高地性集落と倭の動乱

武装したムラ

弥生集落の多くは農耕生活に適した低地に営まれたが、なぜかわざわざ台地上や山腹などの高地に出現する集落遺跡があり、これを弥生系高地性集落（以下、高地性集落とする）とよんでいる。本市の太秦遺跡^{うづまさ}は、河内の高地性集落を語るときに、必ず名前が挙がる有名な遺跡である。河内で初めて出現した高地性集落で、台地上のムラからは南方に広い潟湖と生駒山地・河内平野を眺望し、東

方には淀川水系低地を隔てて北摂の山なみが迫り、南西約二〇キロに大阪湾という景観である。太秦高塚町の標高約五〇メートル付近の一带約八ヘクタールに石鏃・石槍・石剣などの武器石器や、石庖丁・柱状片刃石斧などの大陸系磨製石器をはじめとする遺物の散布がみられたが、残念なことに一九六〇年代以降の諸開発により、遺跡は発掘調査をしないままにほぼ消滅してしまっている。

太秦遺跡は中期初め（畿内第二様式）の淀川左岸・河内の潟湖北岸の丘に出現するが、同じ頃の淀川対岸の高槻市では、丘の上に天神山・奥天神町と塚原の三つの高地性遺跡が営まれていた。天神山遺跡は太秦の北方約十一キロにあり、その数百メートル北に奥天神町遺跡があり、ともに中期末（畿内第四様式）まで存続、塚原遺跡は両集落の西約四キロに位置し後期（畿内第五様式）までムラを営んでいた（小野忠熙編『高地性集落跡の研究・資料編』学生社 一九七九年）。

人と文化の交流の大動脈としての淀川両岸の地域に、おそらくは遠く西方からの軍事的な緊迫に対応するために、防衛機能においてすぐれ、また地域の情報基地として重要な役割をもつ最初の高地性集落が丘陵上の見晴らしのよい地に造られたのであろう。太秦遺跡は弥生中期初めから人びとの居住が始まり、後期までこの集落は存続した。採集遺物に、石剣・石槍・石鏃などの武器石器が多いことは、瀬戸内・大阪湾沿岸に迫る軍事的緊張に対する備えであったことであろう。

またこの遺跡からの採集土器についていえば、弥生中期の各時期に属す土器破片があり、少量の後期土器破片が含まれるが、畿内第二様式土器の占める割合が多い。このことは、この遺跡がその出現の当初から比較的大きな集落であったことを推察させる。また畿内第二様式土器は淀川対岸の摂津の土器に共通し、中期

中頃の第三様式では河内色とされる櫛描くしがき簾状文れんじょうもんや黒っぽい河内胎土かんないどのものが含まれる。

低地から高

太秦遺跡が出現したことで強く関わると思われるのは、高宮八丁遺跡である。低地の大規

地への移住

模な集落であった高宮八丁遺跡の人びとが、軍事的な緊迫からの防御のために、逃げ城的

な機能を持たせて営み始めたものであろう。そして中期初頭を過ぎる頃には、高宮八丁遺跡の人びとは太秦の丘陵上に移住してしまいうらしい。潟湖畔や淀川水系の地域に、何があったというのであろうか。

これとよく似た例は、数十基からなる弥生時代方形周溝墓群ほうけいしゅうこうぼが、中学校建設予定地から発見された事で知られる穂谷川左岸（南岸）の枚方市交北城ノ山遺跡まえばかしやうほくじょうのやまで認められた。丘の上の大遺跡として早くから知られる大阪府史跡田口山遺跡たぐちやまは、穂谷川を隔てたこの交北城ノ山遺跡の消滅と入れ替わりに営まれたものであるらしいのである（瀬川芳則他「淀川左岸の複合遺跡―枚方市交北城ノ山遺跡」『ヒストリア』第九七号 一九八二年）。

枚方台地南縁を流れて淀川に合流する天野川右岸の比高約三〇メートルの低い丘陵上にも、弥生中期に始まるいくつかの集落遺跡がある。国道1号線（枚方バイパス）で断ち切られていた丘の尾根上に広がっていた枚方市星ヶ丘西遺跡では、集落に巡らせていた大きな断面V字の濠が二条と、断面U字の濠一条との三条の濠が約八メートル間隔で並列していた。発掘によって検出された濠はそのごく一部に過ぎなかったが、集落の周囲にめぐらされた環濠であると思われる。これより一時期おくれで出現する後期初頭の高地性集落であるが、大阪南部の和泉市の観音寺山遺跡かんのんじやまは広い複数の丘陵地が、一気に造成された際に発見された高地性集落遺跡である。百棟近い竪穴式住居が発見され、この時期には一般的には消滅しつつあった石製の鎌や投弾等の石製武器を大量に持ち、二重の環濠が居住域である集落の周囲をめぐって、横尾川の崖状になった

第二節 丘の上の太秦遺跡



写真 12 豊中市勝部遺跡出土 戦死者の墓
(豊中市教育委員会提供)

岸壁に至っていた（森浩一他『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館 一九九九年）。
太秦と同じ頃、またはやや先行して営まれた瀬戸内海沿岸付近の高地性集落には、神戸市垂水区大蔵山遺跡^{おおとしやま}・広島市西崎遺跡・同高井遺跡、山口県周南市岡山遺跡・光市長徳寺遺跡・下松市宮原遺跡・柳井市鰐淵遺跡・山口市巾郷遺跡・同亀山遺跡・防府市井上山遺跡・下関市堂ノ尾遺跡、大分県大分市雄城の台遺跡・同速見郡日出町大津遺跡・宇佐市上田原遺跡・同台の原遺跡などがあり（前掲『高地性集落跡の研究』、瀬戸内地方を巻き込む緊迫した状況を推察させている）。

戦士たちの墓

弥生時代中期の畿内では、厚さ一〇センチ近いコウヤマキの板を用いた木棺が雁屋・鬼虎川・瓜生堂・勝部・池田市宮ノ前などの遺跡で発見されている。棺内に副葬品は装飾品を除き多くの場合に伴わないが、勝部遺跡と雁屋遺跡では、戦死した戦士の墓かと思える情況が認められている。大阪万博に伴う大阪国際空港滑走路の拡張に伴う発掘調査で、八基の木棺が検出された勝部遺跡では、折れた石棺が背中から腰部に向かって突き刺さったままの第三号木棺の被葬者の姿が、現存の長さ約一七センチ、幅約三・五センチのサヌカイト製の打製石棺の威力のすごさを示していた（豊中市教育委員会『勝部遺跡』一九七二年）。

また高宮八丁遺跡や太秦遺跡に近い位置にある雁屋遺跡では、二

第三章 稲作の始まり



写真 13 枚方市津田城跡古城地区 焼失した住居址
(財枚方市文化財研究調査会提供)

○基を超えるコウヤマキ・ヒノキ・カヤの棺材を用いた木棺があり、一号周溝墓の二号棺被葬者の胸腹部付近にサヌカイト製の打製石鏃一二本が見つかっている(四條畷市教育委員会『雁屋遺跡』一九八七年)。勝部遺跡でも木棺墓に並んで検出された第二号墓とよんだ土壙墓^{どこうぼ}で、腰骨と肋骨^{ろつこつ}にくい込んだ打製石鏃二本を含む五本の打製石鏃があり、この被葬者が生前に前面から矢を受け、その為に死亡したものと思われた。なお、本州西端では弥生前期の山口県土井ヶ浜遺跡の被葬者は、計一本の石鏃・サメ牙^が鏃が体内に打ち込まれていた(小野忠熙・富士埜勇・山本一朗・中野一人『日本の古代遺跡』30山口 保育社 一九八六年)。

北河内の高地性集落遺跡の立地を見ると、中世動乱期の山城と重複するものがある興味深い(瀬川芳則「大阪の高地性集落―河内の湖北と淀川左岸」『高地性集落と倭国大乱』小野忠熙博士退官記念論集 雄山閣 一九八四年)。例えば生駒山地に続く標高約三百メートルの津田国見山は津田城跡といわれており城坂・門口・古城の地名が残っている。古城地区は標高約九〇メートル付近にあたるが、こと付近の支丘に弥生中期後半の全焼した竪穴式住居跡二棟を含む中・後期の住居跡や、中世山城に伴う防御施設と思われる堀切状の大濠などが見つかっている。この遺跡からの摂津方面への眺望は優れ、西方の眼下には東高野街道とその東(山麓側)を並走する山根街道などの古道が行き交い、南方は寝屋・打上・太秦を経て四條畷・

大東へと通じている。あと一例をあげると、大東市の野崎観音の裏山の標高九〇メートル付近には、高地性集落の野崎遺跡があるが、この丘陵地形の標高一一五メートルには野崎城本丸があった。その北東約一キロの標高約三百十数メートルに、有名な飯盛山城がある。

第三節 河畔の楠遺跡

一 弥生の青銅器

銅鐸 高宮八丁遺跡の南西約三キロから、銅鐸三個が発見されている。一つの地点に三個の銅鐸が埋納されていた例は、今のところ大阪府内で他には無く、これが大阪府での銅鐸最多出土例である。

そこは潟湖の北縁に注いでいた古川の河口付近にあたり、中州と思われる門真市宮野町の京阪電鉄大和田駅構内陸橋南端の基礎工事中に、地下二メートルの砂層中から銅鐸三個が掘り出されて放置してあったのを、工事請負会社の現場監督大西義一が発見した。昭和三十八年（一九六三）四月のことである。

この他に河内潟の湖畔には、明治四十四年（一九一）発見の四條畷市砂山の銅鐸二個がある。発見地点は定かではないが、本市堀溝や小路遺跡の東に四條畷市砂と岡山があり、このあたりからの発見であろう（瀬川芳則「弥生文化と農耕」『大阪府史』第一巻 一九七八年）。この付近で寝屋川が潟湖に流入していたことである。

弥生の青銅器といえば銅鐸といわれるほどであるが、北河内の銅鐸発見地はこの二カ所だけである。そし



写真 14 楠遺跡出土の銅鑄型（単鑄式）

て銅鐸の埋納地は山麓・山腹などの山地であることが多いが、当地では共に淀川（古川）水系・寝屋川水系低地の発見である。また、稀には一カ所に数十個埋納していた出雲の加茂岩倉遺跡（鳥根県雲南市）のような例があるものの、大多数は銅鐸一個の単独埋納である。府内で二個埋納は砂山の他に、豊中市原田神社例と岸和田市流木例があるのみである。

鬼虎川遺跡では、銅鐸や銅鉏を製造していた。当遺跡の北西約七キロの淀川・安威川・茨木川の合流するあたりの茨木市東奈良遺跡では、銅鐸・銅戈・ガラス勾玉の製造をしており、そこが畿内を代表する鑄造工房集落であったことをうかがわせている。鑄造された銅鐸の中には海路によって四国に運ばれたものや、日本海岸の兵庫県豊岡市気比で発見されたものもあったが、いずれにせよ淀川から海路を経由する豊かな水運に恵まれていた。

二 青銅器工房をもつ楠遺跡

銅鑄の鑄型

高宮八丁遺跡の北西約一・五キロの石津南町を中心とする楠遺跡からは、銅鑄を製造したとみられる粘土製の鑄型と、青銅溶液を鑄型に流し込むための取瓶として用いたと思われる高杯状土製品が、弥生後期初めの土坑から出土している（この頃には河内潟湖は全域が淡水化して湖となっていた）。粘土製鑄型は長さ九セ

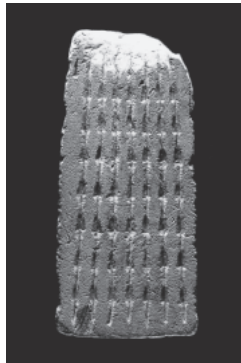
第三節 河畔の楠遺跡

ンチ、幅四・五センチ、厚さ一・五センチの二個一対の土製品で、銅鏃一本の形を彫り込んだと思われる粘土と共に用いたらしい（寝屋川市教育委員会『楠遺跡Ⅱ』二〇〇一年）。土製品の内面には、高温による変色がある。類例は奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡にある。

剣や矛や戈などの武器形の青銅器はいずれも一つずつ単品で铸造されたことが、北部九州や近畿出土の鑄型から判る。楠遺跡出土の銅鏃鑄型も、一鑄型で一本の単品を铸造したと思われる。ところで弥生後期の銅鏃出土例の中に、稀に数本の銅鏃が繋がったままのものがある。明治十六年（一八八三）に六本連鑄のもの、昭和十二年（一九三七）に四本連鑄のものが、現東京国立博物館の館蔵となっているが、いずれも滋賀県伊香郡からの出土例である（本村豪章「近江出土の異形青銅器」『考古学雑誌』第三三卷第三号 一九七七年）。

畿内では後期（第五様式）になると、連鑄による銅鏃製作が一般的になるようである。岸和田市下池田遺跡や大阪市加美遺跡・奈良県橿原市四分遺跡の後期の遺構から、連鑄によって作られた銅鏃が出土している。いずれも近畿における、銅鏃量産の好例である。

福岡県春日市の須玖岡本遺跡群の中の須玖坂本遺跡（坂本地区と名称変更）は、建武中元二年（西暦五十七年）



（表）



（裏）

写真 15 須玖岡本遺跡（坂本地区）出土銅鏃鑄型（連鑄式）（春日市教育委員会提供）

第三章 稲作の始まり

に光武帝から国王が印綬を賜ったと『後漢書』が述べる奴国の遺跡で、弥生中期～後期頃の奴国内における主要鑄造工房の跡である。そこから銅矛・銅鏃・銅鏡・筒形銅製品・ガラス勾玉の鑄型や、埴埴・取瓶・輔の羽口などが出土しているが、弥生後期前半と見られる銅鏃鑄型は、長さ三三・三センチ、幅約一五センチ、厚さ約六・二センチの連鑄式銅鏃鑄型で、片面に計四九本、反対面に八本、合計五七本の銅鏃の形が彫り込まれていた（春日市教育委員会文化財課「弥生時代の鑄造工房跡―福岡県須玖坂本遺跡」『考古学雑誌』第八六巻第四号 二〇〇一年）。

これらの量産された銅鏃は、いずれも実戦用の武器とみられるが、そこには大量の銅鏃を必要とする北部九州の軍事的緊張があった。近畿でも楠遺跡のような銅鏃単鑄から、滋賀県伊香郡例などの銅鏃連鑄へと、緊迫する近畿の弥生後期社会の推移に伴う銅鏃量産の必要があったのであろう。

北部九州に初めての青銅器がもたらされたのは弥生前期末のことで、まず朝鮮半島東南部から朝鮮式の細形銅剣や銅戈・銅矛などの武器が、ついで漢代の鏡がもたらされ、これらが弥生中期以後、北部九州の特定の支配者の甕棺墓に副葬される。奴国や伊都国の王墓がそれである。福岡県春日市伯玄社遺跡は、甕棺墓群や木棺墓を含む土壙墓群で知られるが、前期前半の木棺内から、朝鮮半島からの舶載（輸入）と思われる細身の磨製の石鏃六本が発見され、それらの石鏃は二次的な研ぎ直しをしており、実用で実戦に使用したものであることが判った（春日市教育委員会『伯玄社遺跡』二〇〇三年）。

湖畔の工房

河内の潟湖畔の鑄型出土の鑄造工房遺跡としては、本市の楠遺跡のほかに鬼虎川遺跡がある。ここでは銅鐸・銅釧・異形青銅器の三種類の和泉砂岩製の鑄型が、前期（畿内第一様式）

中期末（畿内第四様式）の包含層から出土して注目された。これらの鋳型の中には円形の銅釧^{くしう}連鋳鋳型に使用した後に、砥石として再利用しているものや、中期初め（畿内第二様式）の土器の中に、鋳造関連でなければ考えられない異常な高熱を二次的に被熱したものがある（財東大阪市文化財協会『鬼虎川の金属器関係遺物』一九八二年）。銅釧鋳型とは銅製鋳物の腕輪用である。北部九州を中心とする地方の弥生社会では、有力者が入手の困難な南海産のゴホウラ貝製の貝輪を愛用していた。中期頃になると、朝鮮半島から鋳物で円形をして銅鑲とよばれる銅釧が少量もたらされる。そして後期になると、ゴホウラ貝製貝輪を模した有鈎銅釧^{こう}を鋳造するようになる。また春日市須玖岡本遺跡では、鈎^{かぎ}をもたない楕円形の銅釧鋳型が発見されている。鬼虎川の鋳型で作られた銅釧は未発見であるが、有鈎銅釧に先行する。またゴホウラ貝製の貝輪を模したものでもない。むしろ朝鮮半島の慶尚北道漁隱洞^{ぎょいんどう}や、平安南道大同美林里などの銅鑲に類似している。

なお鬼虎川では平成十八年（二〇〇六）以降の調査で、新たに四種類目の鋳型として銅釧鋳型が発見された。畿内において銅釧鋳型は、尼崎市田能遺跡^{たのう}で中期前半の土坑からの出土例が知られているのみであった。大陸・朝鮮半島からの先進文化がもつとも早く伝えられた九州北部では、福岡市志賀島^{しかのしま}・佐賀県神埼市姉・同神埼郡吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡などから銅釧の鋳型の出土がある。楠・鬼虎川そして淀川水系の東奈良は、広義の河内の潟湖周辺地域である。また、大阪の淀川水系との関わりが強い京都府向日市鶏冠井遺跡^{けいかい}でもつとも古式なタイプの銅鑲鋳型が、神戸市兵庫区楠荒田遺跡^{くすのきあらた}と西区樫野台（西神ニュータウン内第六五地点遺跡）でも銅鑲の鋳型が出土している。広義の河内の潟湖と大阪湾沿岸が、銅鑲などの青銅器をはじめとする鋳造工房の集中地域であったことが分かる。

畿内では、また奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡では、銅鐸の粘土鑄型が石製鑄型と共に発見されている。従来知られていた弥生時代の青銅器などの鑄型は、砂岩系の石型であり、砂型や粘土型は推定の域に留まっていたが、その後兵庫県三田市で高さ九センチ弱のミニチュア銅鐸の粘土鑄型が見つかった。粘土鑄型は淀川水系の東奈良遺跡でも、銅戈とガラス勾玉の鑄型に用いていた。これらの粘土鑄型（粘土を焼いた土製鑄型）の発見は、大阪湾岸地方における鑄造というような高度な技術のあり方を考えるうえで重要である。なお北部九州と広義の大阪湾岸地方の他に、いまひとつの鑄造の工房地域として播磨南部があげられる。姫路市・赤穂市に複数の鑄型の発見がある。

第四章 古代国家の形成

第一節 五世紀の港湾長保寺遺跡

一 外洋航海できる準構造船

巨大な古墳

大阪に日本の巨大古墳のビッグスリーの全部とビッグファイブの四基が営まれた五世紀は、凡河内の世紀であつた。それは考古学でいうところの、古墳時代中期にあたる。ビッグスリー

とは、大山古墳（仁徳陵古墳）・誉田山古墳（応神陵古墳）・百舌鳥御陵山（履中陵古墳）、ビッグファイブとはこれに岡山の造山古墳と大阪の河内大塚古墳（羽曳野市・松原市）を加えたものをいう。古墳の大きさは、前方後円墳の墳丘の全長であらわし、大山古墳で四八メートル、河内大塚古墳で三三五メートルである。中国南朝の宋の正史に記された倭の大王は、九州王朝を指すとする説もあるが、この凡河内の覇者であつた可能性が大きい。凡河内とは広い河内の意味があり、いわゆる河内国だけでなく摂津や和泉を含んでいる。

ちなみに四世紀（古墳時代前期）には、墳丘の全長が二百メートルを超える大前方後円墳が全国に一一基あり、この一一基のすべてが大和にある。これがいわゆる三輪王朝で、四世紀は大和の世紀といえる。この四世紀の凡河内の地域で大型の古墳を見渡してみると、大阪湾の南部の岸和田市摩湯山古墳と、後の摂津・播磨の境界付近で播磨寄りの大阪湾西端にある神戸市垂水区の五色塚古墳とが、共に約二百メートルの墳丘

第四章 古代国家の形成

の偉容をみせるものの、ともに四世紀末の築成でありまだ百舌鳥・古市の大古墳群地帯の中には、石津川河口の堺市乳の岡古墳（二五メートル）のほかに大きな古墳の姿はない。

五世紀頃になると、京阪電鉄寝屋川車庫や市立木田小学校がある木田元宮一丁目から、南に四條畷市雁屋―大東市中垣内―東大阪市鬼虎川に至っていた弥生時代の潟湖の東岸線は、古川や寝屋川・恩智川の堆積活動によって西方に五キロ以上も移動して、「河内湖Ⅱ」（前掲『続大阪平野発達史』）となり、大阪平野の水域は縮小していた。ただし、木田元町付近から大東市中垣内付近にかけては幅五〇〇メートル―二キロの水域があり、これが寝屋川と恩智川の合流するあたりで西方に約五キロにのびて河内湖本体に続いていた。そしてその先、西方約四キロに上町台地の北端部があり、難波の堀江・難波津を経て大阪湾（茅渚の海）に続いていた。この細長い水域の東岸に面したその北端付近に営まれていたのが、古墳時代中・後期の長保寺遺跡である。

井筒に転用さ
れた古代船

本市昭栄町・出雲町一帯に広がる縄文時代―室町時代の複合遺跡であった長保寺遺跡からは、府道（都市計画道路）国守・黒原線建設と付近の工場・共同住宅建設に伴う大阪府教

育委員会と寝屋川市教育委員会のそれぞれの発掘調査によって、井戸の井筒に再利用された三隻分の船底が発見されている。廃棄された古墳時代中期の準構造船の船底を裁断して、井筒に転用していた。直径一メートル以上の杉の太木を半截して刳り抜いた厚さが一〇センチ前後の船底で、これに舷側板を取り付けた準構造船は全長一〇メートル以上に復原される古代の大型船で、外洋航海ができるものである（大阪府教育委員会『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅱ』一九九一年）。

第一節 五世紀の港湾長保寺遺跡



写真 16 西都原古墳群 169 号墳出土
舟形埴輪（東京国立博物館蔵 重文）
Image : TNM Image Archives

料』二〇〇四年）。長保寺遺跡や薮屋北遺跡は古墳時代中期には、大型古代船を所有する五世紀の港湾であったことであろう。

これらの港を出港した準構造造船は、河内湖から大阪湾・瀬戸内海を漕ぎ渡った。さらに玄界灘・対馬海峡を経て朝鮮海峡をこえて行った。宮崎県西都市西都原古墳群一六九号墳（飯盛塚）出土の舟形埴輪（五世紀、東京国立博物館蔵）や六世紀の柏原市高井田横穴群の線刻画（二支群二二号横穴）から窺えるように、帆をかけていた可能性もあると思われる。これらの港湾には当時の文化の最先端をいく、国際色豊かな港湾都市のイメージがあるようである。

新しい祭祀

長保寺遺跡からは子持勾玉・製塩土器・移動式の韓カマドや甌・屏材など多種の木製品・数十点出土した興味深い用途不明土製品、さらには馬の歯など、様々な遺物が発見されている。

長保寺遺跡の南南東約一・五キロにも、長保寺と類似の立地をもつ四條畷市薮屋北遺跡がある。ここからも最近の調査によって、古墳時代中期の四基の井戸内から転用された船の部材が発見されている。そのうちB地区井戸②は、幅約九七センチと約八二センチの準構造造船の船底部分の転用で、長保寺遺跡と同じく杉の太木を半截して刳抜いた厚さ六・五～七・五センチのものであった（大阪府教育委員会『古墳時代の準構造造船の部材現地公開資

る。子持勾玉（一卷四九五頁図三〇九）は滑石製で全長約一〇センチあり、体側に一〇個の小勾玉を削り出しているもっとも古いタイプに属するものと思われる。動物か魚の形に見える本体の頭部側には、目や鼻や口を表現したもので、頭部にはひもを通すための小孔をあけている。勾玉などのような装飾品ではなく、典型的な祭祀遺物である。堺市の百舌鳥古墳群の中の陵墓参考地のひとつ御廟山（二八七メートル）の後円部の濠外にあったカトンボ山古墳から、大量の滑石製品と共に出土した古式のタイプの四点がよく知られている。カトンボ山古墳は特異な古墳で、人の埋葬はなく、出土した遺物は普通の古墳のそれと異なり、とくに古墳の出土品としては珍しいのが子持勾玉で、百舌鳥古墳群と泉北ニュータウンの一带に広がる須恵器の窯業地帯から多く発見され、五世紀頃に朝鮮半島からもたらされた新しい祭祀に伴うものと指摘されている（森浩一「古市・百舌鳥古墳群と古墳中期の文化」『大阪府史』第一巻 一九七八年）。

子持勾玉は、本市内では、太秦古墳群地域内採集と伝えられている築山沓のコレクションの中に二点ある（一卷四〇四頁図二四六）。二点のうち一点は長さ七センチで体側に八個の小勾玉を削り出し、頭部に小孔をあけている。付近では、四條畷市中野遺跡からも出土している。

この他に東大阪市では、瓜生堂遺跡の上層部からは、長さ六・六センチの緑灰色をした滑石製のいねいな作りの子持勾玉の完形品が出土している（財東大阪市文化財協会『東大阪市文化財協会概報集』一九八九年）。また、村上学園東大阪高等学校体育館新築に伴う調査の際には、未成品が出土している（同『西提遺跡第五次発掘調査報告書』一九九九年）。いずれも五世紀代に属す。生駒山麓の縄文遺跡の縄手遺跡内のえの木古墳にも出土例がある（前掲『東大阪市文化財協会概報集』）。

新しいタイプ（六世紀）の子持勾玉は、東大阪市の生駒山地西麓標高一五メートル付近の横小路町から単独で出土している。復原長一二センチあり、両端に方形の小孔をあけているものである。付近の下六万寺遺跡は、勾玉・有孔円板・刀子・管玉・小玉などの滑石製品が見つかっている祭祀遺跡で、付近には船山明神といわれる式内梶無神社があるなど、入り江の水上交通など水辺の祭祀を物語るものと指摘されている（藤井直正・都出比呂志・河内歴史研究グループ『原始古代の枚岡』東大阪考古学研究会 一九六七年）。五世紀の長保寺の船舶まり（港）で、魚形に思える子持勾玉が、航海の安全を祈願するなどの水辺の祭祀に用いられたのであろうか。双円墳として知られる山畑二二号墳の西丘石室からも、破片が出土している（東大阪市教育局『山畑古墳群Ⅰ』一九七三年）

滑石製の子持勾玉は韓国でも出土している。忠清南道扶余^{ふよ}邑^{ぐんじゅり}軍守里出土の大形の「母子曲玉^{まがたま}」が早くから紹介されている。多数の小形の曲玉が付着し、一方に小孔が貫通している（金廷鶴『韓国の考古学』河出書房新社 一九七二年）。子持勾玉もまた、朝鮮半島南部とのかかわりが強いものであった。

第二節 古墳時代中期の太秦高塚古墳

一 各種の埴輪と副葬品

初期群集墳

六世紀の古墳時代後期に全国的に急増する群集墳（後期古墳群）に先行する初期の群集墳は、五世紀中葉～六世紀前葉の古墳時代中期～後期に形成された小古墳群である。しかし、大阪

第四章 古代国家の形成

平成十三年（二〇〇二）・十五年（二〇〇三）度の第二京阪道路建設に伴う太秦古墳群尾支群の調査で、尾根上に円墳二基を含む二五基の中小の方墳群が確認された。その形成時期は、五世紀中葉～六世紀前葉であった。埋葬主体を含む墳丘部は削平されて残っていなかったが、周濠内から須恵器や埴輪などの遺物が出土している。埴輪は全ての古墳から出土するのではなく、特定の古墳からのみの出土であった。

太秦高塚古墳

太秦高塚古墳は、太秦丘陵の最頂部標高四五メートル付近に位置し、永らく個人の所有地であったため何ら調査の手が入らなかった。

平成五年（一九九三）度に市が古墳を買収し、平成九年（一九九七）度に墳丘測量を実施し、直径三五メー

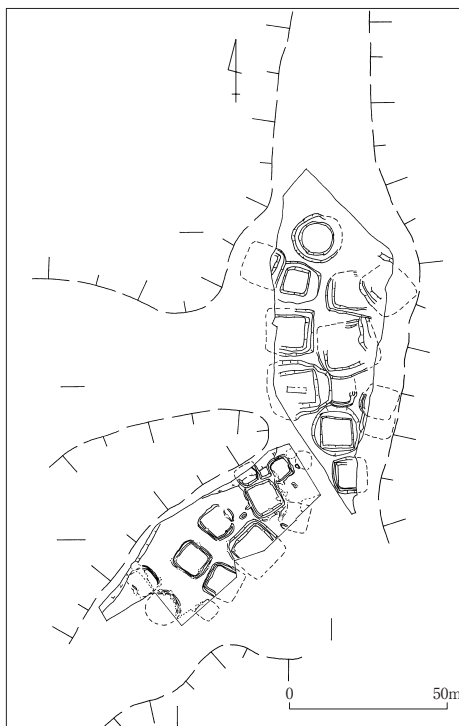


図 15 太秦古墳群尾支群配置図

備考：(財)大阪府文化財センター『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』より転載

府内では良好な資料がなく不明な点が多くあった。本市の太秦古墳群もそのひとつであるが、はやくから同地域は開発のためこれまでは、廻シ塚・トノ山・向ヒ塚・小金塚・墓ノ谷・高塚・モロ塚・コバカ等小字名でしかその様相はわからず、内容についても表面採集の遺物等では推察するしかなかった。しかし、

第二節 古墳時代中期の太秦高塚古墳



写真 17 太秦高塚古墳全景（太秦高塚町）

トル、高さ六メートルで三段に築かれ、墳丘のまわりに幅五～八メートルの周濠をもつ円墳であると考えられた。

ところが平成十三年（二〇〇一）度に実施した古墳の史跡整備に伴う事前の発掘調査の結果、古墳のまわりには周濠がめぐり、周濠底から二メートルの高さの所で幅二・五メートルの平坦部（テラス）が巡っており、古墳が二段に築かれていることが判明した。平坦部には円筒埴輪が立ち並んでいることも明らかになった。さらに、古墳の北西部に造り出しと呼ばれる四角い突出部が付いていることがわかり、北西側に造り出し部をもつ二段築成の円墳であることが明らかになった。また、周濠外側に盛土による周庭帯しゅうていの存在も想定される。

丘全長は三九メートル、周濠底からの高さは約七メートル、墳頂部直径は約九メートル、一段目テラス幅は二・五メートルある。

造り出し部の長さは六メートル、最大幅は一〇・五メートル、上面の長さは三メートル、幅は六・五メートル、周濠幅は約七・五メートル、深さ約二メートルで盾形を呈している。

周濠部から一段目までは、地山を削った上に〇・三メートルの盛土をして成形し、一段目から墳頂部は、すべて盛土を施して成形している。

第四章 古代国家の形成



写真 18 太秦高塚古墳造り出し部埴輪出土状況



写真 19 太秦高塚古墳出土形象埴輪
(巫女)

葺石は、墳丘斜面等で見つからず、周濠底にも転落石が認められないことなどから当初から施されていなかったと推定される。

埴輪は、一段目テラス中央部に円筒埴輪が立て並べられていたことが判明した。しかし、朝顔型埴輪の破片も出土しており、円筒埴輪だけではなく、部分的に朝顔型埴輪が立てられていた可能性も考えられる。埴輪列は、円筒埴輪が一メートルの間に四基の割合で立てられており、一段目テラスの埴輪総数は三四二基であった。

造り出し部にも円筒埴輪が巡っていたと推定され、一段目テラスの円筒埴輪よりもやや大型のものが並べられていたようである。造り出し部の墳丘側埴輪列の中央には朝顔型埴輪が立てられており、その内

側には、杯で酒を飲んでいる人物・顔に入墨をした人物・何かをささげ持つ巫女^{みこ}、家、盾、蓋^{きぬがさ}、水鳥、鶏、甲冑、動物の足等の多種多様な形象埴輪が立てられていることが判明した。

埴輪頂部にも円筒埴輪が破片の出土から立てられていたと推測されるが、小片のため詳細な状況については不明である。

円筒埴輪を観察すると、^{あながま}窖窯で焼成（無黒斑）され、縦ハケ目一次調整のみが見られる。これは川西宏幸の編年でのⅤ期にあたり、五世紀後葉から六世紀前葉のものである。

主体部のある埴輪部は削平を受けており、中央部は西側から盗掘によると思われる破壊を受けて大きくえぐられていた。主体部は埴輪部東側で検出した。墓坑は長さ四メートル、幅一・五メートルで、痕跡より長さ三・六メートル、幅一メートルの組合式木棺が納められていたと推定される。木棺内の南側で副葬品の鉄器類が出土した。内容は、武器が鉄剣・鉄鏃（三〇本以上）、^{びょうどめたんじゅう}武具が鉾留短甲（下部を中心に遺存）・小札^{こざね}、馬具が木心鉄板張輪^{もくしんてつばんはりわ}、^{あがみ}農耕具が大型鑄造鉄斧である。

これらのことから太秦高塚古墳は、出土した須恵器および埴輪より古墳時代中期後半（五世紀後半）に築かれた全長三九メートルの造り出し部をもつ円墳であることが判明した。太秦古墳群の中でも比較的早い時期に造られたと考えられる。

太秦高塚古墳は、この時期では北河内地域最大級の円墳である。

第三節 古墳時代の渡来文化

一 韓式系土器を持つ文化

長保寺・薮屋北岡遺跡をはじめ高宮新町の法復寺遺跡や石津の楠遺跡からは、韓式系土器（朝鮮半島系土器）がたくさん見つかった。朝鮮半島から運ばれてきた須恵質の土器を、陶質土器とよぶこともあるが、ここでは朝鮮半島製の土器と、渡来人たちが製作した土器を含めて韓式系土器とよぶことにする。

韓式系土器は、四條畷市の岡山南・奈良井・中野・南野米崎・四條畷小学校、交野市の森、大東市の鍋田川・寺川メノコ・北新町など、さらには東大阪市の鬼虎川・西ノ辻・芝ヶ丘・縄手・西の口など、河内湖畔の多くの同時期の遺跡から出土している。これらの中には、渡来の工人が後の窯業地帯となる泉北丘陵などに住みついて、製作したものもあるが、その多くは写真16のような大型の古代船で朝鮮半島南部から搬入したものと思われる。

移動式の

カマド

四條畷市立四條畷小学校のプール工事の際に見つかった円底短形の韓式系土器の壺などは、朝鮮半島南部の洛東江流域の伽耶地方から渡来人が持参したものであろう。釜山華明洞古墳群出土の土器に、似たものがみられる。

朝鮮半島からもたらされた調理の炊飯具は、持ち運びのできるカマドと胴が長くなってカマドに載せるのに都合がよい甕（釜）と甗の三機種を三点セットにして、甗の上に蓋をして用いるものである。これを韓



写真 20 四條畷市中野遺跡ほか出土韓カマド
(四條畷市立歴史民俗資料館提供)

カマドというが、長保寺遺跡からはカマドだけでもこれまでに三点以上出土している。この頃になると堅穴式住居の中央部ではなく壁ぎわに設けた造付けのカマドがあらわれるが、これもまた朝鮮半島からもたらされたものである。

韓カマドを用いて炊飯の煙を立ちのぼらせていた五世紀のムラは、長保寺遺跡の他に楠遺跡など先述の韓式系土器をも多くの遺跡がそうであったことであろう。それらの中には、渡来人やその子孫たちの姿がずいぶん多くあったと思われるのである。朝鮮半島との結びつきを強く示す土器に、糸紡ぎに用いる断面形がソロバン玉形をした紡錘車ぼうすいしゃがあり、楠遺跡から須恵質の、西ノ辻遺跡から土製の紡錘車ちゅうそうが出土している。朝鮮半島製の鑄造鉄器の出土が、森遺跡と

西の辻遺跡にみられる。ともに鑄造の鉄斧てつふである。

造り付け式のカマド

長保寺遺跡から多数出土した遺物の中に、完形品でなかったこともあって用途不明とされていたU字状の土製品（二巻八四五頁図版五九―6）がある。幅が約一〇センチ、厚さが一―二センチの板状をなし、片面からだけ火熱を受けているもので、土製品の胎土には生駒山西麓の黒っぽい粘土を使って作っている。その後、四條畷市葺屋北遺跡でこの土製品の形が復原され、U字形板状土製品と呼ばれることになった（濱田延充「U字形板状土製品考」『古代学研究』第一六七号 二〇〇四年）。類似の土製品は、

二 乗馬風習と治水の土木

馬の登場

あの巨大な古墳に秘められた五世紀の河内の大王政権の実力は、すぐれた土木技術、おびただしい鉄すなわち朝鮮半島南部から搬入した素材としての鉄鋌^{てつてい}や、鋤^{くわ}先・鋤^{すき}先・鎌・斧・鉞^{やりがんな}・鉞^{きり}などの鉄製の農工具や、鋤^{くわ}・剣・刀・矛・甲冑などの武器・武具類や、朝鮮三国との交流をものがたる馬具類などにかがえる軍事力・生産力であろう。

古墳に馬形埴輪が作られ始めるのは五世紀になってからである。四世紀には発見例がない。古墳に馬具類



写真 21 長保寺遺跡出土 U 字型板状土製品

韓国ソウル市内の漢江南岸の百濟漢城時代の王京の遺跡（風納土城）からも発見されており、ソウルにある国立文化財研究所の遺蹟調査研究室の展示場におかれている。そしてこれを住居内造り付け式のカマドの焚^たき口部^{くぶ}の外側に取り付けるプロテクターの用途をもつと見ている。その祖形としては、黄海南道の壁画古墳安岳^{あんがく}三号墳の前室の、東側室に描かれた厨房図にある高句麗式のカマドと、平安北道雲山の龍湖洞^{りゅうこどう}一号墳出土の鉄製のカマドである。これらのカマドは、中国遼陽地方のカマドとは異なるもので、焚^たき口が煙突に対し直角の方向に付く高句麗式である。五世紀の河内湖畔には、こういう構造をもつカマドで炊事する風景もあった。



写真 22 四條畷市奈良井遺跡出土馬の頭骨
(四條畷市立歴史民俗資料館提供)

を副葬するようになるのも、五世紀以降である。中国南朝の宋の范曄はんへつが著わした『後漢書』東夷伝には、倭の地に「牛・馬・虎・豹・羊・鵲」ひょうなしと述べているが、『古事記』・『日本書紀』(以下、記・紀と表記)によると応神朝に百濟王から馬二頭が贈られたとしている。

考古学的にみると、はじめて馬の発見があったのは昭和四十二年(一九六七)、堅田直と帝塚山大学考古学研究室による東大阪市日下貝塚くさかの発掘であつた(帝塚山大学考古学研究室『東大阪市日下遺跡調査概要』一九六七年)。ほとんど完全な五世紀後半の馬の骨がセタシジミの貝塚内に、丁寧に埋葬されていた。体高一二五―一三〇センチの蒙古系の中型馬で、現代の馬に比べるとずいぶん小形に思える馬である。その一〇年前に紀の川沿いの和歌山市大谷古墳で大陸色の濃厚な馬具類が出土していたが(和歌山市教育委員会『大谷古墳』一九五九年)、その中に日本では今日なお他に発見例がない馬の胃かぶとがあり、日下の馬の頭骨のサイズと一致した。馬に甲冑かっちゅうをつけた騎馬の軍団の姿が彷彿とするが、こうした五世紀代の馬飼育の牧が河内の湖畔の一带に広がっていたのであろう。湖畔の東縁ともいえる部屋北・鎌田・奈良井・中野などの遺跡は、馬の骨が発見されたことで知られている。

第四章 古代国家の形成



写真 23 四條畷市中野遺跡出土馬糞と製塩土器
(四條畷市立歴史民俗資料館提供)

河内湖畔の製 塩と馬飼育

長保寺遺跡から多数出土した遺物に、製塩土器がある（第一卷四八八頁図三〇五）。製塩土器は塩を作るための土器で、河内湖畔では、J R 片町線（学研都市線）の複線化に伴う発掘などで、膨大な量の製塩土器が中野遺跡から初めて発見され、さらに製塩炉の遺構までもが検出された。

大阪湾まで行かなければ近くには海水が得られない湖東の地で、製塩作業が五世紀に行われていたのである。二十一世紀に入って、破壊を運命づけられた大規模発掘が北河内でも進められている。国や府の自動車道建設は、その最たるものである。その発掘調査の成果として、様々な考古学上の発見があるが、そのひとつに

随所の湖畔の遺跡出土の製塩土器がある。

太陽の直射で海水を濃縮してできた鹹水^{かんすい}を、製塩土器に入れて炉で加熱しながら、何度も鹹水を追加する煎熬^{せじょう}によって、薄いコップ状の製塩土器内の塩を一杯にしていくなのである。このような製塩には不適なところで行う製塩は、馬飼育のためである。馬は古代にあっては、貴重であった。のちの養老令^{きやうらうりやう}の厩牧令^{うまぼかりやう}には、毎日稲三升・粟一升・豆二升をあたる細馬^{さいば}には日に塩二勺^{しやう}、毎日稲若しくは豆二升をあたる中馬には塩一勺を給する規定がある。

継体紀によると、越の男大迹王^{おおとど}が河内に政權を置くに際して、河内馬飼首^{うまかいのおび}荒籠^{あらこ}の果たした役割が大きい。また天武紀には、一四の氏族に連^{むらじ}の姓^{かばね}を与えた四氏の馬飼があり、その中に沙羅羅^{さらら}

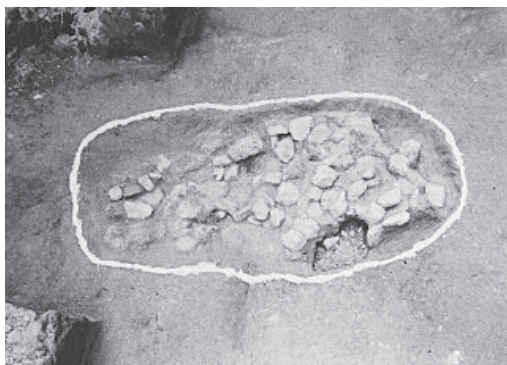


写真 24 四條畷市奈良井遺跡の製塩炉
(四條畷市立歴史民俗資料館提供)

育と調教術は、乗馬の風習のない倭^わの地にあつては、その専門家たちの同行が不可欠であつた。長保寺遺跡でも馬の歯が出土しているが、この頃湖畔にあつた馬の牧は、鉄の武器・武具と共に河内の大王がもつ卓越した軍勢力となつていたことであろう。どのような船が、馬を運んできたのであろうか。

記・紀によると大王家は大阪南部の百舌鳥・古市古墳群を陵墓地帯とし、半島状の上町台地の北端に近い眺望の良い地に王宮を営んでいたが、東北方の淀川氾濫原に築堤工事を成功させ、上町台地北端の堆積低地に堀江を掘削してあふれる水を海に流出させた。この水路掘削に伴い、難波津^{なだわづ}が新たに生まれることになつ

馬^{うま}飼^{かい}造^の・菟野^{うの}馬飼造^の・川内^{かわち}馬飼造^のの三氏の名を挙げている。こ

れら三氏の馬飼は、いずれも河内湖東畔付近の渡来系の馬飼氏族である。ちなみに山口博によると本市の小路と隣接の四條畷市砂・岡山付近は、現存最古の書写である高山寺本『和名類聚抄^{わみょうるいじょうしやう}』の讚良郡五郷内に「牧岡」とあり、古くはここが沙羅羅・菟野の馬飼の地であつたという(『四條畷市史』第一卷 一九八四年改訂 三八頁)。

古今東西の歴史が物語るように、馬と鉄と船はその飼育・調教や鍛冶・熔解や造船・航海の技術が、国家の機密に近いもので、いわば門外不出に近いといえるであろう。

百済王が河内の王に二頭の馬を贈るという記・紀の伝承は、両国の親善・同盟関係なしには考えにくい話を伝えている。またその飼

た。仁徳紀には、皇后の磐之媛は、海から難波津を経て淀川・木津川をさかのぼって山背の筒城に向かい、聖徳太子の時には、初めての隋からの使者裴世清たちはここで大歓迎を受け、高麗館の近くの新築の館に泊まったのち、ほとんどの区間を船で大和の三輪山の麓の海石榴市に着いたのである。

河内の大王はまさしく治水王にふさわしく、従来は技術上不可能であった治水工事を達成した。最新の土木技術が、この王朝にはあったのである。本市黒原新町の西方約五百メートルの守口市大庭北遺跡では、五世紀後半に整然とした大型倉庫群一六棟が検出されて、難波の大王の王宮関連の倉庫と考えられる大阪市法円坂遺跡と、ほぼ同時期と思われるU字形大溝が北方にある淀川に向かって流れる排水機能を持っていた（瀬川芳則「茨田屯倉の大溝と古墳」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ 一九八七年）。新たな農耕地開発にあたり農耕悪水の排除をもつ水路をもっていたわけで、すぐれた農耕土木技術といえる。五世紀頃の大王家による耕作地としての、茨田屯倉成立を物語っているのであらうか。先述の越の大王男大迹王は、越の国の治水王としての伝説をもっている。

他の地方と比べて、いち早く新来の渡来文化を受け入れた人びとの、暮らしの跡である湖畔の地域の考古学は、五世紀の大王政権の成立と形成についての歴史情報を、著しく豊富にしてきた。その結果、河内湖畔の古代茨田・讃良・河内郡地域が、少しずつ明確になってきている。

第四節 古墳の終わり

一 群集墳の出現

横穴式石室 六世紀にはいると古墳の様相は著しく変容する。中期後半から後期前半にかけて全国的に大室の採用 型古墳の造営は下火になり、古墳の規模が小さくなる傾向にある。そして、近畿地方を中心

に「横穴式古墳」が各地に出現し始める。中国に源流を持つ横穴式石室は朝鮮半島を通じてわが国に伝えられた。横穴式石室の採用に伴い畿内のみならず全国各地において古墳の築造が増大し、古墳が群集して数多く造られるようになる。いわゆる「群集墳」である。大阪府内では富田林市の一須賀古墳群、和泉市の信太千塚、八尾市の高安千塚などが有名である。

北河内は大阪府内でも他の地域に比べて横穴式古墳の数の少ない地域である。

横穴式石室の採用は、それに伴う埋葬觀念の変化を意味しており、とりもおさず社会構造の変化を示すものである。それ以前における古墳は権力の象徴であり、共同体における首長層の墓であった。横穴式石室の普及は共同体のなかにおける家父長層にまで古墳の築造がひろがり、さらには横穴式石室が家族墓として合葬あるいは追葬の場として使用せられ、古墳に葬られる人々の範囲も拡大され、もはや以前のような特定の人々（首長層）の権力を象徴するものではなくなってしまった。

市内の群集墳

市域では明確な群集墳は先述の太秦古墳群尾支群の初期群集墳以外は確認されていない。

しかし、その痕跡を先述の太秦古墳群と打上地区にみる事ができる。打上地区においては、江戸時代の『河内名所図会』に「八十塚、同村にあり。由縁不詳。八十は其数の多きをいふ」、また、『日本輿地通志』の「畿内部卷第三七河内国十一交野郡」の条には「八十塚。打上村にあり、高塚・堀塚・呉塚・唐塚・中塚などあり、田をなすためにすいたので半ば失われた」と記載されており、現在ではみることができないが、打上地区にはかつて古墳が多く存在していたことを示している。市立明和小学校の正門の北東約五〇メートルのところに多数の花崗岩が集められている。これらの巨石はかつてこの付近にあったであろうと推察される古墳の横穴式石室の石材に使用されていたものであると考えられる。また、同じ打上地区にある明光寺の門前には凝灰岩の石棺を利用した「雷神石らいじんせき」と呼ばれている石碑も存在する。

太秦古墳群は、廻シ塚・トノ山・向ヒ塚・小金塚・墓ノ谷・高塚・モロ塚・コバカ等の小字が知られているが、これらの地域から巨石が発見されたという言い伝えもなく、現在のところそのような痕跡もないことから、太秦古墳群の埋葬施設は、先述の太秦高塚古墳のように木棺直葬であったと考えられ、横穴式石室を有すると考えられる打上古墳群とは様相を異にしている。

寝屋古墳

寝屋古墳は、東西方向にのびる海拔四五～四七メートルの丘陵の南斜面に位置している。墳丘は尾根状地形の西側及び南側より立地し、すぐ南の眼下には打上川が流れている。

昭和五十三年（一九七八）本市教育委員会社会教育課による石室内部の実測調査、平成三年（一九九一）本市教育委員会市史編纂室（当時）の墳丘実測、平成四年（一九九二）大阪府教育委員会文化財保護課の寝屋川



写真 25 寝屋古墳（寝屋川公園）

公園自由広場整備に伴う発掘調査の計三回の調査が実施されている。とくに、大阪府教育委員会の調査では、現状保存を目的とした最小限度の調査ではあったが多くの成果が得られた。

墳丘全体はかなりの削平を受けていたが、北側において幅三メートル、深さ一メートルの周濠を確認し、南側では石室羨道部の側壁石列の南端を検出した。調査成果から、寝屋古墳は直径二二メートルで、墳丘の高さは現状で北側が約二・八メートル、南側羨道部から約五メートルの円墳であることが明らかになった。調査の結果、現状の石室が玄室部分で、石室の全長を復元すると、一〇メートル程度となり北河内地域最大、大阪府内有数のものであることが明らかになった。

埋葬施設は、花崗岩を積み上げてつくられた横穴式石室である。石室の規模は、全長一〇メートル、玄室長五・五メートル、玄室の奥壁幅二・五メートル、羨道幅一・二メートル、高さは玄室奥壁部で一・六メートルであるが、石室の構造からみて一メートルちかくは土砂の堆積があるものと推察される。また玄室の一部及び羨道部の天井石・側石は無くなってしまっているが、現状では入口部が幅約二メートル、高さ約一メートルほど開口している。石室は、主軸をほぼ南北に向けて、入口は南面している。石室の天井部には二個の巨石が置かれている。

石室の石を据えるための穴は、積み上げている花崗岩の裏側二メートルにおよび、石室構築後さらに墳丘



写真 26 奥山1号墳（寝屋川公園）
（助大阪府文化財センター提供）

上を盛土整形していたと推察される。

古墳から出土した遺物としては、平成四年の調査において六世紀後半の須恵器の杯破片が出土しているのみである。墳丘上に葺石や埴輪は検出されていない。

奥山一号墳は、第二京阪道路の建設に先立つて行われた発掘調査によって発見された。古墳

は寝屋古墳の北西約四〇〇メートルの打上川右岸の丘陵上の尾根の頂上部に立地している。打上川を隔てて対峙する西の丘陵上には、太秦高塚古墳が所在し、かつては多くの古墳があった太秦古墳群

が存在していた。古墳の墳丘は後世の削平によりほぼ失われている。

墳丘の規模は、墳丘裾で直径約一八メートルでまわりに幅約五メートルの周溝が巡っているが、古墳を全周せず、東側の一部が陸橋状に残っている。また、西側周溝の底面から、尾根斜面にのびる幅〇・三〇・五メートル、深さは周溝外のもっとも深い所で約〇・三五メートルの排水溝を検出した。埋葬施設は、横穴式石室であるが、墳丘部が削平されているため、石室の一番下の石しか残っておらず、奥壁や玄室と羨道との境の石も抜き取られていた。石室の規模は、全長約九メートル、玄室長約四メートル、幅約一七・一・六五メートル、羨道長約四・九メートル、幅約一・四五メートルの右片袖式である。石室は、主軸をほぼ東西に向けて、入口は西面している。

第四節 古墳の終り

石室の床面からは、追葬の際に設置されたと考えられる扁平な石を八個三列に配した棺台が検出されている。また、石室の閉塞石も発見されている。出土遺物としては、西側周溝内から甕・壺・壺・長脚二段透かしの高杯・高杯の蓋・台付き壺・提瓶等がある。石室内からは、椀・短頸壺・長頸壺・平瓶・提瓶などの土器類のほか、耳環二点（金環・銀環）・象嵌が施された太刀の鐔・鉄銚・鉄鎌・弓の飾り金具・刀子・馬具などの金属製品、玉類・人骨などの多くの遺物が出土した。周溝の土器は六世紀後半、石室内の土器は七世紀初頭のものであり、石室内の土器は追葬時のものと考えられる。

二 終末期の石宝殿古墳

終末期古墳

六世紀の末頃になると、古墳時代の葬制のなかで大きな変化がみられる。それは、前方後円墳の消滅である。そして、古墳時代後期の最大の特徴であった群集墳もあまり造営されなくなってくる。以後、首長墓は大型の方墳や円墳を造営するようになり、この変化は同時に畿内以外の地域でも行われるようになる。しかし、その後八世紀初頭までのあいだ古墳は造られつづける。これらの古墳は、律令体制の移行期から完成期へという過程のなかでの特殊な状況下で造られた古墳である。

この時期すなわち終末期古墳の種類としては、横穴式石室・割石積の小型の横穴式石室・切石の横穴式石室・横口式石槨・磚槨などがあり、このうち市内には打上地区の打上（高良）神社境内の山中に横口式石槨を有する石宝殿古墳が存在する。



写真 27 石宝殿古墳（打上元町）

石宝殿古墳

石宝殿古墳は、生駒山地から派生する丘陵の南斜面に築かれており、現状は巨大な横口式石槨が露出している。横口式石槨は畿内に集中し、とくに大和と河内に集中してみられ、石宝殿古墳だけが河内でも北の北河内地域に唯一存在している古墳時代終末期のものである。

古墳は、四個の巨石を組み合わせて造られている。遺骸を納める主体部の横口式石槨は上石と下石（台石）に分かれ、上石は直径約三メートル、高さ約一・五メートルの角閃石花崗閃緑岩の巨石を刳りぬいて墓室としている。内部は、幅〇・九メートル、高さ〇・八メートル、奥行き二・二メートルで、入口部分は縦〇・

七五メートル、横〇・五五メートルと狭くなっている。その入口には片開きの扉を付けていた痕跡がみられる。その前には一・四メートルの間隔で二個の板状の巨石が一対立ち並んで羨道（通路）を造っている。下石（台石）は縦約三メートル、横一・五メートル、厚さ〇・六メートル以上ある。同様な構造の横口式石槨を持つ古墳としては、奈良県明日香村の鬼の俎（まないた）・雪隠古墳（せういんこふん）と斑鳩町の御坊山三号墳（ごぼうやまさんごうぼん）しかなく、極めて稀な古墳で、唯一、原位置に保存されていることは非常に貴重なことである。

古墳の背後には、長さ一・五メートル前後、幅〇・七メートル前後、深さ一メートル以上の三個の花崗岩の巨石が一行に並んでいる。これらの列石は、昭和六十三年（一九八八）の発掘調査で、古墳の主体部

北側（背後）の山の斜面に対して土留めの役割をもつて構築されていることが明らかになった。さらに列石の西に続く巨石が埋まっていることが明らかになった。この新たな石と列石との設置角は一三五度で、これらの列石を古墳の外側のラインとして復元すると、古墳の平面形が八角形となる可能性が推測される。また、主体部の横口式石槨と背後斜面にある列石と主体部の間及び東側で石敷を検出した。石敷は、一〇―三〇センチ大の花崗岩を平坦面を上面にして丁寧に敷き詰められていた。石敷は古墳の主体部と後ろの列石の間でもっとも良好な状態で検出されたが、本来は古墳の周辺全体に敷かれていたものと推察される。

出土遺物としては、石敷の間から須恵器の杯蓋の蓋の小片が二点出土している。須恵器は小片のため所属時期の決定については困難であるが、七世紀中葉後半と考えられる。

古墳は、江戸時代には現在のように横口式石槨が露出し、開口していたことが当時の記録に記されており、古くから知られていたが、納められていた棺の形状や副葬品等はまったく知られておらず不明である。また、列石や敷石のあり方などから古墳が造られた当初から盛土があったかなかったかもこの古墳の謎の一つである。

石室殿古墳は、広瀬和雄の型式・編年ではC型4期に該当し（広瀬和雄「横口式石槨の編年と系譜」『考古学雑誌』第八〇巻第四号 一九九五年）、出土土器や横口式石槨の構造から七世紀中頃に造られたものと推察される。この時期は、一般には古墳が造られなくなる時期になり、葬られていた人物については、墓誌^{ほし}などが出土していないので不明であるが、この地域を治めた有力豪族で、中央の政権と強い繋がりをもった人物と推察される。